# 十編 長門守

大阪の巻

274
347

始

特 100
6377

宮内省圖書寮

木村長門守
大坂城書

正
2. 8. 11
内交

## 發刊の主意

一家團欒して、面白く、愉快に讀んで行く中に、識らず〳〵智情意の發達を助けて行かうとするのが本書の目的である。

皆知名の文士が熱血を注いで書いたものであるから、確かに我が講談界に一異彩を放つであらう。

講談社

# はしがき

ひとの戀路を邪魔する奴は、犬に嚙まれて……とかいふ小唄は古くからあるが、ひとりの男、ひとりの女を、ふたりの女、ふたりの男が戀ひして、遂にひとりが美しい犠牲になつた小唄は、あるのか無いのかまだ聞いたことがない。それでは昔から戀路の邪魔ではなく、戀路を助けた美しい男女の犠牲者は無かつたのだらうか、とそんなことは今更反問しなくても、情史を繰り展げたら直ぐ解ることだ。本篇に描いた片桐市ノ正の娘蜻蛉は即ちこの美しい女の犠牲者である。死ぬほど戀ひした重

成様を、奥づとめで姉妹のやうに親しくなつた尾花が、また死ぬほど慕つてゐると知つて、あはれ十八のまだ綻びもせぬ蕾の花を、伊達には持たぬ九寸五分、武士の娘の守刀で、怨言も言はず、無殘々々と散らしたのであつた。

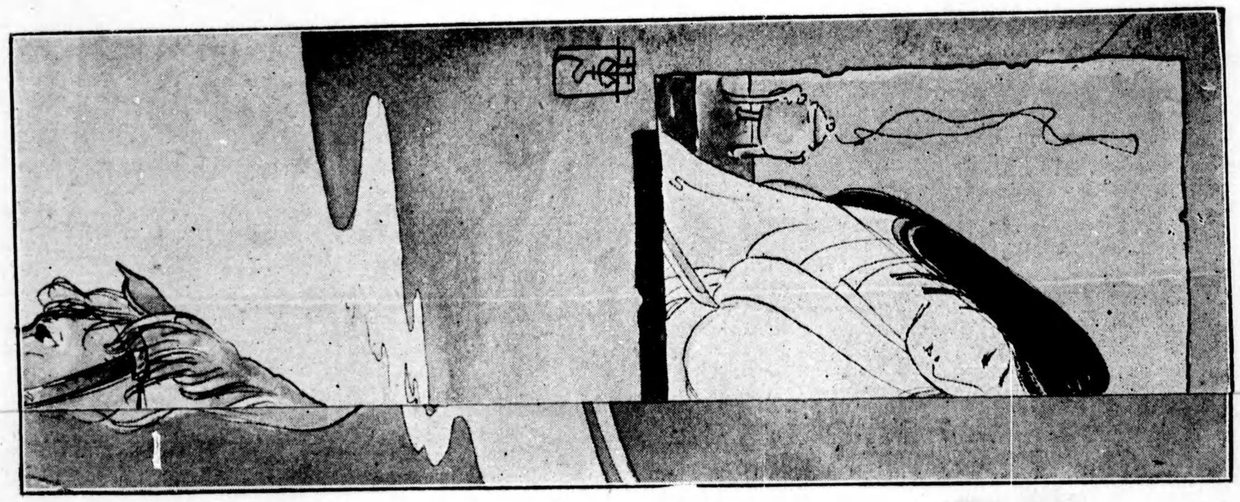
然し、それは本篇を貫いた事件ではない。堅田の里から天晴れ武士になつて大阪に出た木村綱千代の重成は何うなつたであらうか、山瀬をはじめ獄卒のやうな情知らずの惡人ばらは何うなつたであらうか、さてまた大阪城を照した最後の夕日は何んな光りを地に投げたであらうか、この『大阪の卷』は主としてそれを描いたのである。

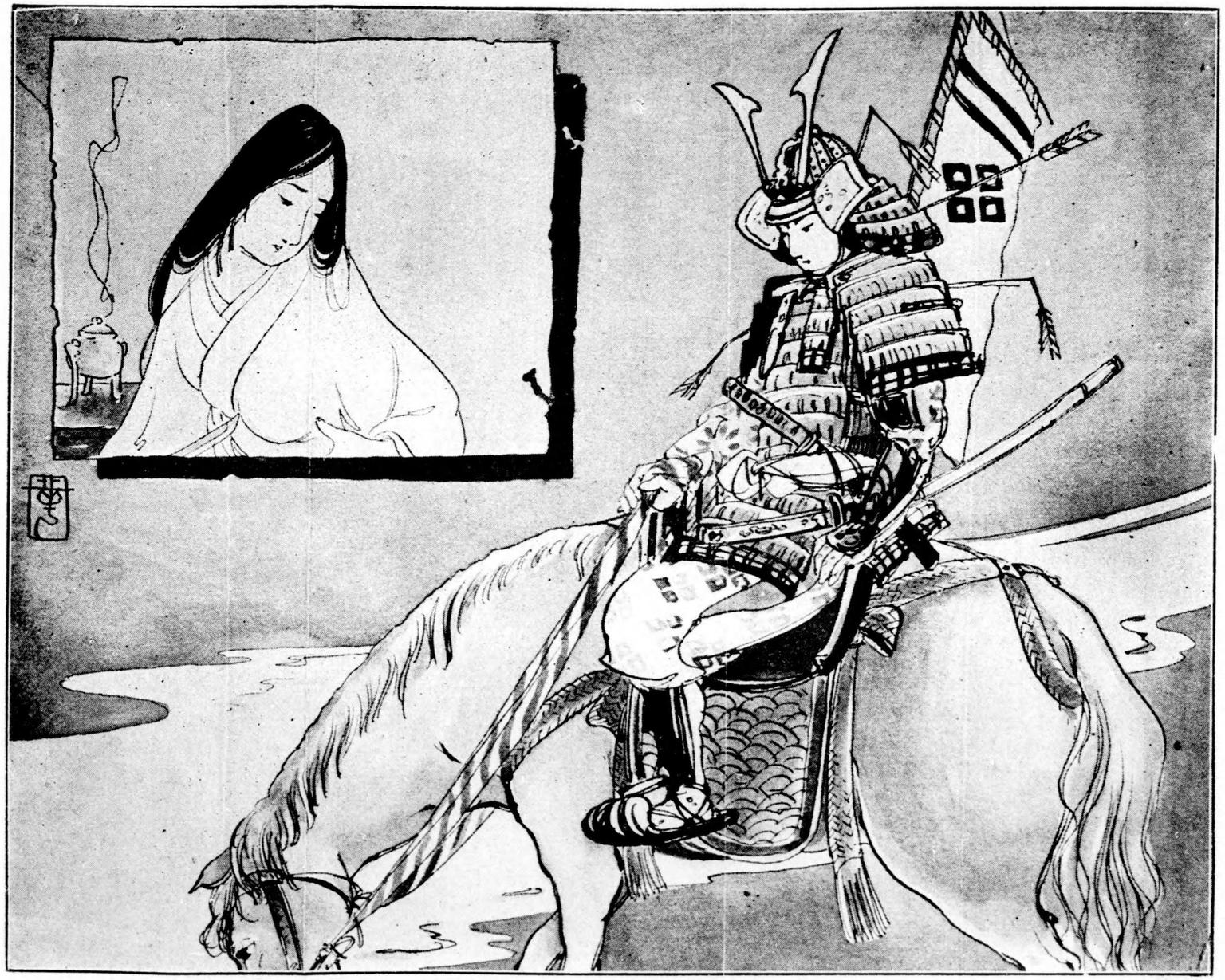
この篇は曩に出版した『堅田之卷』の後篇であること、こゝに斷るまでもない。

大正二年六月初旬

痛むともなき頭の中に夏の動くを感じながら

夢想兵衛


用心
1



家庭新講談第七編

# 木村長門守（大阪之巻）

夢想兵衛

## （一）

葦の枯葉吹くちぬの浦風に、短く寒き冬の日は何時しか過ぎて、明くれば慶長十四年、長門守重成は生年正に十七歳となつた。天のなせる麗はしい容姿は、昨日の若衆姿を色鮮かな花に譬へるならば、今日の社祢

着けた出仕姿は正しく是れ若葉の蔭の清水である、男旱魃の大奥の腰元どもは、寄ると觸るとに表衆の品定めして、籠の鳥にも均しい奥づとめの其の日其の日を送るが習であれば、重成のこの涼しい、凛々しい姿がどうして、何として彼等の眼にとまらずに、品定めの口に乘らずに居らうぞ。

今日は二月中の九日、住吉浦の貝寄せの日である。何時もならば、淀君御初め老女腰元ども大奥は隅から隅まで出拂うて、ざんざゝめく浦の漣波とお饒舌の口を競はせて、一日を樂しく面白く暮すのであるが、昨日からの生憎な春雨に惜しや御催しは沙汰やみとなつた、けれど淀の方樣歸依淺からぬ住吉神社貝寄せの祭日であるから、老女腰元御末の婢に至るまで、今朝はとうから御酒を頂いて、今日一日はどんたく、少し位は噪いだとて笑ひ合つたとて、別にお咎めは無いとのことに、平素木の間で少さくなつてゐる雀どもが、友呼びかはして軒端の瓦に群がつたやう、其所のお部屋でも此所のお部屋でも、さゞめき、どよめき、春は今日ばかりと言つた有樣である。道中すご六で一番に京へ着いたと言つて躍り跳ねるがあれば、歌がるたに散々負けして可愛い顏に白粉べタべゝ、口惜しい、口惜しいと言ひつゞけるもある。遊びといふ遊びは何も彼も爲つくして、さて何をせうと言ひ顏に見合はす眼と眼、白粉べタべ

夕の梶の葉の顔を表衆の誰やらに似てゐると、口より先きに生れた椋鳥が言へば、それにお饒舌の緒を得て、『さ、それでは表衆の角力の取組ぢや、取組ぢや』と御末の紅梅が頓狂聲の音頭に、一同は早や車座になつて眼をかゞやかした。

『修理どの（大野修理亮治長）に隼人どの（薄田隼人）かたやは脊すンがりの優形、かたやは肥肉の肥満男、柄がよいのは地合が悪し、地のよいのは柄が下卑ます、サア〳〵皆さん何方でも擇り取り見取りに贔負しやんせ。』

『まあ、修理どのと隼人どのとの取組を、土俵開きの序の幕に出すは、チト可哀さうではござんせぬか。』と苦情を言ひ立てるものがあれば、

『いゝえ、さうではござんせぬ。序開きは確かりとした御贔負筋のある御角力取でなければ人氣が立ちませぬ。』と言ひ返へすもあつたが、結果は、

『脊すンがりの優男も惡うは無いが、私や花より團子、見て呉れよりも德用向き、隼人さまに腰帶といて花に投げまするると、紅梅が其の頰を紅梅ほど紅うして何に感じてか力み返つたので、ドッと囃し立てる中にこの取り組は薄田隼人に軍配が上がつた、淀君の御寵愛を鼻の先きにぶら下げて、腰元どもを女臭いとも思はぬ大野修理亮が日頃高慢ちきな振舞

を皆々これで敵討ちした思ひ。

『サア其次ぎは。』

『大野どの弟御（主馬）に渡邊どの（内藏助）はよい取組ではござんせぬか。』

『ほんに、これはよい取組、私や何方も負かしとも無い。』

『ほゝ、兩手に花はチト慾が深過ぎようぞえ。』

『そんなら是れは中を取つて、水入り引き分けて何方へも半星ぢや。』

『サアそれからは。』

『青木民部どのに猪飼左馬どのは何うでござんすえ。』

『これは此所等どころの角力ではござんせぬ。』

『サア其の次ぎは。』

『銀之亟（渡邊内藏助弟）さまに津川左近さまはどうでござんすえ。』

『椋鳥どの、そんな取組を今頃土俵に出して何うなさるぞいの、加之銀様はお性根が些つとばかり抜けてゐやしやるし、お年も下、斯んな取り組は櫓太鼓の打出しごろぢや。』と棍の葉がからかひ顔に云ふと、椋鳥はムク〳〵と面ふくらして、

『棍の葉どのにかゝつては、銀様はもう銀蠅同様ぢや。』

『お氣もじ様。』

『ほゝ、これはまあお二人とも大分由ありげな爭ひぢや、では番外お好みで取組ませては何うでござんすえ。』

『いえ〳〵、そんな番外お好みなら、私や機敷を出て了ひます。』と梶の葉はなほもからかひ顏に椋鳥を尻目にかけて云ふ。

『サァ〳〵、そんなくだらぬ悶着に土俵を空にしておいては見物が迷惑でござんす。』

氣轉の利いた挨拶に、續いて飄輕者の紅梅が頓狂聲を張り上げて、

『番數追々と取り重ねまして、かたや横綱木村長門どの……さァ、皆さんこのお相手はえ。』

『これは紅梅どの、横綱は大出來でござんした。』

『ほんに、長門さまは横綱に不足ない。』

『では、そのお相手は？』

『さァ、そのお相手は誰れであらうぞいな。』

『滋賀の浦に浪華の浦』

『さ、その浪華の浦と名乘つて土俵に出るものは誰れであらう。』

唐崎の一つ松、比類なき常盤の色には、はて誰れが相手の浪華江に咲くや木の花ぞ、相手さへ定めかねて、あはれ長門どの長門どのと、腰元どもは眼を細うして褒めそやしてゐる。

最前から餘りの賑やかさに、天の岩戸を細目に開けた形で、淀君には大藏局その他の老女達を從へて、お次の間まで氣散じかたゞ、お出ましになつてゐたが、腰元どもが横綱よと横綱よと褒めそやすその綱千代を召し寄せて見たうなつた、四十の坂に手のとゞいた姥櫻ながら、流石殘んの色香は、淀の川瀬を水鏡にして映しても見たいほどである。

『誰れぞ行て、長門を呼んで來やいのう。』

長門お召しの御意は早や御使番の女中に傳へられた。さらぬだに垣間見したしと思ふ重成樣を此所へ呼んで來よとのお言葉に、御使番は歡び勇んでバタ〳〵と駈け出して行つた。中の溜所で辛つとその重成樣を見つけ出すと、

『長門さま、御方樣のお召しでございます。』

と女中どもは我れ先きにと黄色い聲を張り上げた。時しも相役と和漢の合戰について議論を戰はして居つた重成は、この聲を聞いて飛び上るほどに打驚いた。

『なに、某を、あの淀樣が――』

『さいな、お召しでございます、私どもは今日の御使番、おためらひは御無禮でございますぞえ。』

重成は訝しと思ひながらも、辭むべき理由も無いので、軈て腰元に案

内せられて、お廊下を幾曲り、大奥へと伺候した。

お次ぎに集つた腰元ども、それ長門様ぢや横綱ぢやと、凡そ垣間見出來るほどの隙間には、抜き足差し足忍び寄つて『待たしやんせ、も些つと私が。』『いえ〳〵、もう約束ぢや、私の番でござんす。』などゝ、眉を八字にして押し合ひへし合ひ。

大藏局は出迎へて、

『これは〳〵長門殿、早速の御伺候、御前様にも御満足でござりませうぞ。』

『御表方の某し、不意のお召しに取り敢へず罷出でました、御用の筋は何事でござりまするか。』と一禮して、母やゐますと一座を見廻はす時、不圖眼についたは宮内が室の山瀬である。『はて、山瀬どのはまだ出仕御遠慮の筈であるに。』と重成は思はず眉を顰めた。

その顔を淀君はしげ〳〵と御覽じて、

『長門、近う進みや。』とこぼるゝばかりの笑みを湛へた。

『はッ。』と重成は又平伏する。

『召したのは別段用事のある譯では無けれど、其方はいかい話上手とのこと豫ね〳〵聞いてゐるゆゑ、今日は雨降りの徒然に、何ぞ變つた話聞きたいと思うてぢや。でもまあ、元服してからは一段と凛々しい侍にな

りやつたの。』

淀君のこの仰せを早やそれと覺つた正榮尼は、賢しら立つて一膝乘り出し、

『長門どの、有難い御意、お身の冥加でござりませう、差當つての御用も無くば、暫くこれにゐて何ぞお咄し申上げられませ、母御は今日は住吉樣への御代參、でも追付けお歸りなさるであらうわいな。』

『某し如きを咄し上手などゝは恐れ入つたる御仰せ。』

『いや〳〵、能ある鷹は爪を隱すとはよう言ふことぢや。したがまだ年も行かねば、斯ういふ所では心もひけよう、今、盃を取せませう。』

御座近く控へた女の童が持ち出す土器に銚子の酒うけて、淀君は晴れやかな御氣色で頒け、

『さ、これ取らす。』

盃は軈て女の童に運ばれて重成の前に置かれた。

お次ぎから垣間見の腰元ども、『まあ、御前樣の御移氣な、あれほど修理どのに忠勤とやらを勵ませておいて、その上長門どのまで。』ともうそろ〳〵及ばぬ法界悋氣を始めた。

重成はこの御盃受くべきか、受けざるべきかと、やゝ心に惑ふ所があつたが、不圖思ひついた一案に心を決して、盃押し頂きグイと飲み干し

て。

『御意といひ、御盃といひ、重成身にとり是れに越す面目はございませぬ、御禮は母より改めて申上げまする、大藏殿、正榮尼殿、御前よしなに御執りなし願ひ奉ります。』と態と局の方へ辭禮して、拜領の御盃は手早く懷紙に押包んで御前を退らうとすると、

『長門、苦しうない、その盃返しや。』

（二）

酒席に献酬やかましい封建時代に於て、一種の意味を含んで献された盃を、請はるゝまゝに返盃するならば、そは既に服從默諾の意を表はすものである、知るや知らずや、淀君の御眼には中々怪しからぬ光りを帶びてゐることを。

重成は只だ差俯向いて石のやうに固くなつた。取りなしに物腰馴れた老女達も、流石に事柄が事柄だけに、我れ取りなしをと差出る者もなく座は少しく白けて來た。

『こりやまあ、ひよんなことになつたものぢや。』と、一同呆氣にとられてゐると、先きのほどからムツ、リとして控へてゐた彼の山瀨、胸に一物ありげな顏付で一同をずらりと見廻はし、

『何れも様を出し抜いて、山瀬風情が差出がましうはございますれど、御方様が苦しうないと仰せられるに、長門どのがおためらひなさるを見ては、此のまゝにも差し措かれませぬ――いやなに長門どの、御前様がお容しなされた御返盃をおためらひなされるは、家來としての道ではござりますまいぞ。』

『某しとてそれはよく辨へ居りますれど、餘りと申せば御無禮に當りますゆゑ。』

『さ、その御無禮を容す、苦しうないとの仰せではござりませぬか、さ、その御盃早う。』

重成は返答に窮して又差俯向いた。

山瀬が取りなし顔の胸の一物を、早くも見抜いたものは饗庭局であつた。曾て右京局のお部屋で、堅田から市郎兵衛が注進に來た折の一伍一什が胸にあるので、讀めた、解せた、この山瀬堅田の敵を大阪の今此所で討つ精神か、右京局を妹とも思ふ饗庭局、長門は可愛い甥にも異ならぬ、何ぞ山瀬に言ひ過ぎでもあればと、手ぐすね引いて待つのであつた。

何と云うても懐の盃を出さうともせぬ重成の傍へ、時分はよしとッかゝと歩み寄つた山瀬、

『長門どの、これほどに申しても御事には通じぬのでございますかえ、御方様の仰せに反くは、御事が常日頃口癖のやうに云はしやる忠義とやらに戻りはしませぬかえ。忠義に戻つてまでも御返盃申上げぬは……はゝア、解つた、解りました、御事はあの佐々木殿のお娘御、尾花とやらともう早くに出來てゐやしやるな、さうであろ、二世を契つたあの可愛い娘御に心中立てして、それで御前様へ御返盃なさらぬぢやな、さうぢや、それに決つた。』と笠にかゝつて憎體に云ふ。

饗庭局は堪りかねて、

『山瀬どの御前でござりまするぞ、チトお辭を慎み召されい。今聞いて居りますれば、御末の婢でもなほ顔を赧らめるやうなことを、そもじは誰れを相手に言はしやります、長門どのは近頃のお召し出しではあれど御物頭の上席、殊には上様御乳母右京殿の忰を相手に、場所柄をも辨へず、餘りと申せば無禮でござります。』と眉をキリ〳〵と吊り上げた。

『ほゝ、これは又饗庭殿には異なお叱り、御前様の仰せに從はぬ不所存者を責めるが何で無禮でござりませう。そもじは右京殿とは御昵懇の間柄、なれどそれは私事、その私事に引かれてこの公事に横車を扨さうとは、そもじまで御前様を蔑ろになさるお心でござりますかえ』御前様を楯に前後へ喰つてかゝる山瀬の毒舌を、誰れも憎しとは思ふものゝ、口

出して淀君の御氣に觸れるが怖ろしさに、一人として進み出る者が無い山瀨はこれをよいことにして、又重成に向つて、

『さ、長門どの、どうあつてもその御盃差上げぬとあらば、この山瀨は内後見長曾我部宮内が妻の權威を以て無理にも……』と言ひつゝ摺り寄つて、局の身にあらうことか、ッと重成が懷へ手を差入れた。

おのれやれと先刻から怒り心頭に達してゐる重成は、山瀨が手首を衣紋の上から無手と掴んで。

『山瀨どの、何となさる、他人の懷中へ無斷に手を差入れて、それで内後見長曾我部宮内殿の室でござるか、御返盃仕ると否とは某しの存念にあること、御身づれが折檻、餘りと申せば差出がましい、それさへあるにこの無體は何事ぞ。御前でなくば御身が息の根はもうとくに絶たれて居りまするぞ。』と大力に任せて山瀨が手首をギューと握り締めた。

『あいたゝゝゝゝ、こりや、なにを、あいたゝゝゝゝ。』

『長門、山瀨を捕へて何としやる。』と淀君は先刻の笑顔はもう穗にも見せず、柳眉をキリリと逆立てた。

『はッ』と畏まつて手先を緩めると、山瀨は得たりと素早く掴んだ土器を握り壞して引き出し、『ほんに若い者の短氣な、老人の細腕がすんでのことに碎けて了ふ所であつた、おゝ痛や、』と言ひながら、紙を開いて盃

を取り出し、

『ヤ、、、、これはしたり、御盃が木ッ葉微塵ぢや。てもさても、長門どのは義理堅い、これほどまでにしてあの尾花とやらに心中立てなさるのかいな。それにしても勿體無いこの御盃を、長門どの此の言譯はなんとなさるゝ』と、威丈高になつて詰め寄る山瀬と差俯向いてキリ〳〵と無念の齒がみをなす重成とを見比べた饗庭局は、土器の破れたこともそれを罪科に重成を罪に落さうとすることも大方は悟つてゐるが、今は淀君よほど御不興の體であるから、取りなしは却つて御心に觸れるばかりと、是れも無念の涙を人知れず呑んだのである。

山瀬は當座の思ひ付きの好計が斯ほどまで巧く圖に當つたことを内心打喜びながら、

『なんと皆さん、この山瀬が長門どのを不忠と言ひましたも、これで御合點でござりませう。眞堅田の尾花とやらに心中立てなされてか、それは第二と致しましても、勿體ないこの御盃をこの樣に木ッ葉微塵に碎いて了ふ所は、どうしても仇し女の盃は受けぬと云ふ覺悟に違ひござりますまい。これが不忠で無うて何でござりませう。それをそんじよそこらのお局樣は……』と圖に乘つて得意の舌頭をペラ〳〵廻はしてゐる時、お長廊下に當つて、『御代參の御歸りイ』と語尾を長く引く聲が聞え

た。それ右京様のお歸りぢやと、お次の間の腰元ども三五人走り出て右京局を迎へ、中にも重成贔負の者は云々と口早やに事の顛末を語り告げた。聞いて驚いた右京局は、相手が山瀬であるだけに我子の一大事と、廊下を駈けてお居間へ通つた。と見ると、山瀬は塗骨の扇子振り上げて、今や將に重成の面部を打たんとしてゐる所であつた。

『山瀬どの、不忠者の御折檻御容赦なく願ひまする。』と右京は聲高く言ひ放つた。

意外の言葉に呆れる腰元どもよりも、山瀬は一層驚いた。奸計は八九分通り仕了せて、こゝ一分か二分といふ所で、これは又面倒な人が歸つて來たものかな。山瀬は突嗟に斯う思つて、振り上げた扇子を打ち下しも得せず、暫くは惡婆が折檻の場を活人畫にしたやう。その光景の間抜けさ加減は無かつたのである。

斯くと見た右京の局はツカ〳〵と御前へ進み、『御代參途中事なく只今歸參仕りました。』と眼前何事も起つて居らぬかのやう、落ちつき拂つて言上した。

『役目大儀であつた。』とばかり、淀君も流石に打つて變つた愛嬌は見せられなかつた。

『お言葉恐悦に存じます。』と右京は會釋するや否、腰を低うして山瀬の

傍まで退つて、

『こゝな不忠者、御表方の身で何とて御法度の大奥へ足踏み入れました山瀬どの何御躊躇、えゝもどかしい、その扇子お貸下され。』と云ふより早く引つ奪るやうに取つて、重成が肩のあたりを丁々と二打ち三打ち、

『早や、退りませい。』と睨め据ゑた。

重成は先刻山瀬が持つたる扇子を振り上げた時、もうこれまでと馬手差の柄に手をかけたが、『勘忍々々』と云ふ堅田の恩師の聲が耳元に鋭く聞え、それと同時に鎌田六郎が朱に染まつて斃れてゐる光景が歴然と眼に浮んだので、柄にかけた手を危く滑らしたのであつたが、その刹那に母が入つて來ての臨機の處置に、打たれながらも心に感謝して、『退りませい』との聲を機會に、淀君の方へ一禮して默々として退いた。

右京が臨機の處置を『天晴れ』と心に稱賛する饗庭局に引かへ、山瀬は張合抜けのした不平さに佛頂面して、自分の座席へ歸らうとすると、

『山瀬どの、御秘藏の御扇を不束の悴が折檻に汚しましたるだん、何ぼう申譯ないことでござります。どうぞお納めおき下さりませ。』

禮を云ふのやら當て擦るのやら分らぬやうな右京の挨拶に、山瀬は只だもう人々の手前、穴あらば入りたいほどの心である。

## （三）

淀君も流石に氣恥かしいか、ッと起つてお居間へ歸られる、その御氣色普通ならずと見て、大藏、正榮尼、山瀨なんどお氣に入りの老女達は皆々畏れ入つた體に附き從ふ。

煙たい淀君や老女達がゐなくなつたので、腰元達は再び花咲く我が、世に逢つたやうに、又ペチャクチャ饒舌くり始めた。

『何時見ても山瀨どのゝお顏は怖いではござんせぬか。』

『さいな、あの頰骨の高い、眼の窪んだ御面相は、お年はまだ四十を些と出たばかりぢやにもう五十の上に見えますわいのう。』

『したが、あの方にも、それは〳〵佳い甥御がござるを、お前樣知つてでかいな。』

『いゝえ、些つとも知らぬ、その樣に佳い甥御がお在りかいな。』

『私やこの間鳥渡見たばかりぢやが……』

『それでうも惚の字かえ。』

『まあ默つて聞かしやんせ、色の白さなら脊恰好なら、あれで凛々しい所があれば、長門さまを相手に西の横綱には結構据わらうぞえ。』

『して、お年は幾歳ぐらゐ。』

『さあ、もう十七八にもならうが、まだ前髪立ちゆゑ、やつと十六位にしか見えませぬ。鳶が鷹を生んだと云ふが、山瀬どの〻甥御としては、まあ鳶に鷹でござんせうなあ。』

『へえ、それはまあ、でもその様な甥御のあることは遂ぞ聞かなんだではござんせぬか。』

『さア、それが私にも不思議でならぬ、その甥御の御兩親といふのは、松前藩とかにゐるとかゐたとかの噂ぢやけど、それにしては東國育ちの甥御が餘りみやびやか過ぎる、大きな聲では云はれぬけれど、あの山瀬どの〻ことゆゑ、若しや御前様に取り入る道具に使ふのではあるまいかと、私や思ふて居るのでござんすがのう。』

『ほんに然うかも知れぬ。上様の御勘氣に觸れて御夫婦とも此の間まで御遠慮の身であつたを、牝があの嘴で御前様に泣きついて、やつとこせでお詫びが叶ふたのぢやからな、此の上にも御前様に取り入らうための道具にするのかも知れぬ。』

『それに只つた今長門様にあの様な難題を持ちかけた所など、なか〳〵魂膽があり相ではござんせぬかいな。』

『ほんになア、一々奸計のあり相な仕打ちでござんした。さう思ふと私や長門様がお可哀相でお可哀相で……。』

『ほい、ほい、大分風向きが……。』

『いゝえいな、色氣は抜きにして、眞實お可哀相ではござんせぬか。血氣盛りのお年で、あの樣に大奥の衆がズラリと居並んだ前で、山瀨どのからは恥ぢしめられる、右京樣からは御折檻を受ける、長門樣のあの時のお心持は、まあどうであつたらうと、私や神ぞ貰ひ泣きしましたわいな。それにしても、あの佐々木殿の尾花姫とやらと好い仲ぢやといふは眞實であらうか。これも矢張り山瀨どのゝ魂膽で、尾花が露の濡衣着せて、長門樣を失策せうためではあるまいか、のう小車どの。』

『さア、したが、筒井筒振分髪の昔よりと云ふ唄さへもござんす故な、すれつ、もつれつ、相生の、松と松との若緑……。』

『これ〳〵、歌舞伎踊りの聲音は、こゝの御殿では禁物ぢやぞえ。』

『ほんに然うでござんした。』と小車が眼を圓うして我れと我が手を口に當てる時、

『錦木さんに小車さん、私や耳寄りな話を持つて來たに、仲間入りさせて下さらぬかえ。』

と花野といふが御使番が交代になつて入つて來た。

『これは花野さん、耳寄りな話とは何でござんすえ。』

『さ、耳寄りも耳寄り、大耳寄りな話でござんす。したがお二人さん、

法界悋氣の角を生やしてはなりませぬぞえ。先刻長門樣へお召しの旨を傳へに行く途中、鳥渡小耳に挾んだことなれど、市正樣のお娘御蜻蛉さまな、あの方と長門樣とは結髮になつたとやら、なるとやら修理殿と渡邊殿との立話であつたが、眞實でござんせうか。』

『ほう、これは初耳ぢや。』

『私も聞き初めぢや。』

『そんならまだ誰樣も御存知ないのでござんすか。』

『些つとも知らなんだ。』

『長門樣の御器量や品格は、もう市正樣のお眼には早うにとまつてゐようからな。』

『さいな、それで私も眞實であらうかとも思ふけれど、又堅田の噂もあるしな。』

『こりや、何方が何うやら、薩張分らぬ。したが、その結髮が眞實なら銀之亟樣が狂氣になつて了はうぞえ。』

『ほゝゝゝ、然うでござんす、銀樣が蜻蛉どのに戀ひ焦れてゐることは並大抵ぢやござんせぬからな。』

『けれど、歡ぶものもあらうぞえ。』

『喜ぶものとはえ。』

『それ、あそこに、獨り舞臺のやうに饒舌くつてゐる、鼻の先きの圓々と肥えた、頰紅の厚化粧……。』

『何ぢや、椋鳥どのゝことかえ。』

『さいな、この間の晩、私がお廊下を通ると小暗い蔭で銀之亟樣の袂を引つ張つてさ……』

『椋鳥どのがかえ。』

『あの顏で？』

『銀之亟樣に？』

『うふゝゝゝ。』

『おほゝゝゝ。』

『あはゝゝゝ。』

『けれど馬には馬づれぢや、銀樣ぢやとて正榮樣の御次男であればこそ銀樣ぢやが、餘りお悧巧な方でもござんせぬからなあ。』

『その銀樣が蜻蛉どのを戀してゐるとえ？』

『それが又可笑しいことには、あの根性まがりの正榮尼どの、我子の阿呆は解らぬものと見えて、あはれこの戀かなへてやりたいと、市正殿へ直接に申入れたとやら、子にかけては親は阿呆なものでござんすわいのう。』

『それで、市正殿の御挨拶はえ？』

『それはもう極つてある。』

『首が横か。』

『やれ〳〵。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

秀頼公の傳役片桐市正且元が後妻一葉の前の腹に生れた、今年十六歳になる蜻蛉といふがある。良妻賢母のほまれ高い一葉の前が、丹精凝らしての養育に、絲竹のすさびから敷島の道にいたるまで、もう此の年齢で身に備へ、その上母が昔日の花盛りを、色も香も増して咲き返らせたと、母の昔日を知るほどの人からは皆な褒めたゝへられるほどあつて、まだ夏の朝の露を慕ふて旭日に翅を輝やかしもせぬに、大阪城の内外凡そ血の通つてゐるほどの若侍は、蜻蛉の名を知らぬはない。

父も母ももうこれが末の子と思はれるにつけても、可愛さは一入増して、一日片時も膝下を離れさせともないのであるが、元來且元は小出播磨守秀政と共に、德川家康の推擧に依つて大阪の政權に與る執權職となつてゐるので、秀政が家康の嫌疑に觸れてその職を退いてからは、大任は且元獨りの双肩にかゝつた。且元は日夜心を碎いて君家萬年のために

種々計畫してゐるのであるが、兎角人心相背離して疑心暗鬼を放つ當時の大阪にあつては、旦元にとつて思ひもかけぬ諸種の風説が何所からともなく立つて來る。素より忠臣の彼れは、内に省みておのが赤誠を信じてゐるから、斯かる風説には耳も傾けまいとは思ふが、然し幼君秀頼公と淀君とを相手であるから、兎角その風説が計畫企圖の支障となることが少くない。この君臣動もすれば風聞雑説のために隔てられんとするのを、繋ぎとめるために、大奥の奥深い淀君の下へ宮仕へに差上げられてあるのが蜻蛉姫である。素より人質など云ふ恐ろしい名は表へ出されて居らぬが、淀君から命じたか旦元から願ひ出たか、兎に角蜻蛉は十五の春から奥づとめの奉公をしてゐるのである。

## （四）

重成が大奥で圖らぬ災難に出遭つてから、凡そ四五十日の日が經ち、初夏を迎へる葉櫻の淡い緑の蔭が、人の心に活々とした力を漲らせる頃堅田の義郷は何の前觸れもなく、突如として重成が許へ訪ねて來た。一年の間にもうすつかり大人びた尾花姫を連れ、供には市郎兵衛と太兵衛とを從へた。

恩師の訪問を受けることは思ひがけなかつたが、まだそれよりも重成

母子にとつて思ひがけないことがあつた。

それはこのほど秀頼公からの使者として、大藏の局と正榮尼とが義郷の許へ來つて、佐々木の娘尾花姫は、容姿といひ遊藝といひ、堅田の片田舍に生ひ立ちながら、既にその名は浪華の都までも聞えてゐる、上樣秀頼公にはこの由聞し召されて、是非に一度見まほしく思され、殊に千姫どの（二代將軍徳川秀忠の女にして、秀頼の室たり。）御身體弱く、迚も御世嗣を産ませ給ふとも思はれねば、追つては御側近くもかしづかせるに依つて、取り急ぎ仕度を整へて大阪へ參らせよとのことであつた。

この意外の話を聞いて驚き呆れる重成母子の顔を凝と見て、義郷はなほ言葉を續ける。

『佐々木の家は祖先源三より弓矢取つてこそ家を起せ、女子の蔭に立つたことはござらぬ。殊に私は今日浪人の身ぢや、主人もなければ家來もない。假令右大臣家にもせよ、この義郷に命を下す謂はれなければ、從つて心に染まぬことは辭まれぬことは無い筈。したが、茲にひとつの難儀といふは、私が思ふに、元來この事は秀頼公の御心から出たことぢやない、屹度奸計を抱く者があつて先づ御母儀を說き、それから否應なしに秀頼公を納得させたものと思はれるに就いては、是れを拒む佐々木の家は素より何のお咎めを蒙る筈もないが、其の間に讒言を構へて必定御

身達母子に仇するに相違ない、難儀と申すはそれでござる。』義郷は老眼にやゝ怒りを見せて物語つた。重成母子は、さては山瀬等の奸計かと、先づ無念の涙を呑んで、彼の大奥に於ける山瀬が無體の振舞を事細かに語つた。一々頷いて聞いて居つた義郷は、

『惡人ばらがそれほど根ぶかく企んだことなれば、尋常の手段ではその裏を掻くことも難しかろ、それについて右京どの、重成どの、義郷が終生のお願がござる。何とお聞き届け下さるまいか。』

『これは又弟子の綱千代に對して改まつたるお言葉、世に深き御恩を忝けなうした貴方樣の仰せ、重成母子身に叶ふことならば何なりとも厭はぬ所存でござります。』

『切めて御恩の萬一にも報ひましたいと常々思うて居りまする、御遠慮無う仰せ下さりませ。』

『いや、御恩の義理のと言はれては、今更お願ひするも厚顏しい次第ぢやが、別儀では無い娘尾花を重成どのに貰うて頂きたいのぢや。』

重成はやゝ意外の面持であつたが、母の右京は少しも驚く氣色なく、膝乘り出し小聲になつて、

『佐々木どの、有難いお思召、右京は何とお禮を申上げて宜いやら、云ふべき辭も存じませぬ。實を申せば妾より折を見てお願ひ申上げたいと

思うて居りました。今此の席で斯様なことを申上げるも妙なものでございますが、妾は二十年近う奥づとめして數多い若い女衆を見て居りますれど、お娘御ほどの方はまだ見たことがございませぬ、佐々木どの、これは右京の端ない世辭ではございませぬぞ。』

『いや、何とも恐縮でござる。私も斯ほどまで子煩惱ではなかつたが、何さま年はとるし、其上尾花は申せば私が手ひとつで育てた奴ぢやでな……さ、斯うして尾花を貰ひ受けて貰へば、何奴の好計かは知らぬが武士たる者の新妻を奥づとめに出せとはよもや申すまい。それはさうと重成どの、御事最前から默つて居らつしやるのは、私が願ひ御承諾下されてのことか。』

斯う言はれて重成は漸く顔を擧げた。

『恩師や母上にお辭を返しますのは、重成熱湯を呑むほど心苦しい次第でございまする、重成素よりこの縁組不承知を唱へる心は更々ありませぬなれど、今遽かに妻室を持つことには少しく同意なり兼ねる仔細がございます。そも過ぐる日の某し不覺は、皆な因を質せば山瀨が企の根無しごと、尾花どのを引合ひに出して散々の惡たれ口も、某しの心を知る者には、却つて彼れめが心の穢なさを笑はせるばかり。とはいへそれだけに、今遽かにこの縁組を取り行ふに於ては、さては重成は山瀨が言ひ

しに違はず……と一方は某しの心を知る者にまで疑ひを起させ、一方は山瀬めに此後言ひ募らせる證據を與へることゝなりまする。それもこれも某しが心は神かけて潔白なれば、さして心苦しいとも存じませぬがお師匠、母上、僞りにもいたせ上樣お召し出しの御意ありとのこと一旦あつたる上からは、その實否を質さでは、重成何とも心苦しうござります。』常には滔々河懸の辯の重成も、心苦しげに言ひ澁りながら此所まで語つて來ると、襖の蔭でよゝと泣く女の聲。

『尾花、これへ通つてお母子に御挨拶せい。』と義鄕は優しく言つて隣室へ振り返つた。

『は……い。』といふ返辭も微かな涙聲。

『早く挨拶させるが禮とは思うたが、生中に挨拶させて事の破れた時、乙女氣の嘸ぞ恥ぢ入ることならんとの親心から、ツイ今まで挨拶もさせずにおいた。右京どの、重成どの、無禮はお容し下され。』

父の言葉の終る時、尾花は涙顏の恥しさやら何やらで、差し俯向いて父の蔭に座り、

『小母上さま、綱さま、お久しうございます。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この夜、秀頼公の御前へお人拂ひを願うて伺候した二人の局があつた一人は饗庭の局、一人は右京の局である。秀頼公にも何所となく待ちわびたやうな面持ちで、ゆつたりと脇息に凭つてゐる。饗庭の局と右京の局とは、交る交る力の籠つた小聲で何事か申上げた。

『乳母も饗庭も怨ずるな、己も既十八ぢや、それほどの分別はある。餘の人でもあることか言はゞ俺の弟の長門ぢやないか。女どもの話に聞けば長門も憎からず思ふとるげな、それに尾花とやらもいたいけぢやといふ。それを知つてゐて俺が何うして……心配すな心配すな。』

右京はもう涙を流して、『何時もながら勿體ないお言葉、乳母は冥加に餘つてお禮は口にも上りませぬ。上様の御發明には、決してさる事御本心から仰せ出されること萬々なしとは存じましたなれど、只今も申上げましたる通り、中間に在つて企む者の舌の頭に御母儀さまも迷はされておゐで遊ばすことでござりますれば、どうぞ只今申上げましたることお聞きとゞけ下さいまする樣、お願ひ申上げます。』

『あゝ、解つてある、解つてある。俺は千どの(千姫)がいたいけぢやに他に誰れを近づけようぞ。只だ母上に頭から押へられて、否應なしに承知させられたのぢや。御殿へ參つたら、今度は俺が媒酌で、直ぐに長門に祝言させてやる。』

二人の局は何所まで有難いお思召しぞと、嬉し涙に搔き暮れて暫しは言をも得言はなんだ。軈てお人拂ひを解いて二人は御前を退りお次ぎへ來ると、そこに思ひもかけぬお茶道の珍伯が突立の蔭に蹲つてゐた。

『や、お前はお茶道。』

『何用あつて斯んな所に。』

と二人は瞬きもせず珍伯の顏を見詰めて詰め寄つた。

（五）

其の後淀君よりも再三のお使者があり、又右京の局からは上樣の御心は確かめ得たから、側女の嬖妾のと聞くも身の毛立つ忌はしいことでは無い、この際再三のお召しを辭むに於ては、我れから需めて惡人ばらの術中に陷るやうなものである。大奧には萬事思慮深い饗庭樣もゐるし、及ばずながら右京も居ります、又表衆では執權市正殿始め眞野豐後殿其他陰になり陽になつて此方を庇つて下さる者も少くないに依つて、決して御心配には及びませぬ、かう云ふ申し入れもあつたので、佐々木義郷も遂に尾花姫を宮仕へに差上げることゝなつた。

母なくて生ひ立つた尾花姫は、身の取りなしから言の云ひやうまで、もう一廉の貴婦人である。父に連れられ大阪に出て、戀し慕はし懷かし

の重成様が、社祢着けた凛々しいお姿を見た時は、嬉しいやら恥しいやら昔は顔見るも言云ふも我が顔の紅らむとも思はなんだ其の人に、挨拶するもお顔は得見ず、耳のあたり溫火にあたゝめられるやうであつた。その重成様とひとつ大阪の土地でこれから住まふのかと思ふと、只だも涙のこぼれるほど嬉しいのであるが、それにしても待ち遠しいは御祝言の日である。『重成様は、この縁組更々不承知ではないが、』今はならぬとのこと、今はならぬが軈ては夫ぢや妻ぢやと言はぬばかりの仰せ、も嬉しいとも勿體ないとも……したが、聞けばこの身は何うやら奥づとめに參らねばならぬさうな、奥づとめとあるからは、あの何時やら忌はしいことのお使者に來た、意地の惡さうな尼様やお局様にも、あれ爲いこれ爲いと言ひつけられるのであらうか。お疑心深いとのお噂ある淀の方様は、性根惡の山瀬どのから有ること無いことを聞かれて、兎や角うとお疑ぐり遊ばしはすまいか、秀頼様のお側へも出ねばならぬといふがあの乳母の話に聞いた厭らしい太閤様のお子様ゆへ、若しやそのお性質を承けておゐで遊ばしたら何うせう。いえ〳〵それよりも數多い腰元衆の中には意地の惡い女もあらうに、その口から種々のことを言ひ觸らされて、若しや重成様に厭な厭な思ひをさせ、もう妻にはせぬ、夫ではないなどゝ言はれたらどうせう。この世で切れた縁の彼の世で繋がる筈は

無からうに……あゝ、妾や何うしたらよいのであろう。斯んな時乳母がゐたら、いろ〳〵と智惠かして、慰めても呉れようものを、その乳母はゐず……ほんに乳母と言へば堅田の父様は、もうこれからは愈々お獨りでお暮しなさらねばならぬ。お年を召すと人は誰れも寂しうなり心細うなるものぢやといふに、そのお年を召して寂しう心細うなつてから乳母は死んで了ひ、綱千代様はゐやしやらず、そして又妾が斯うして大阪へ來て了うた。今日から先きの朝夕を、まあどうしてお暮しなさるであろ、何時やら獨言のやうに『其方は家附きの一人娘、若し綱千代が常陸殿の世嗣ぎで無かつたら、養子に貰ひ受けて、亂世を餘所に靜かに暮したいものぢやに。』とお言ひ遊ばしたやうに、重成様にも添はれ、父様にも離れずにゐることは出來ぬものであらうか……

賢しいも愚かなるも愚痴の怨みは戀の常、尾花姫は小さい胸にそれからそれへと思ひ續けた。

斯くて日ならず城中へ召され、部屋親は饗庭の局、身の勤めは朝夕の御給使、御座所近の御小間使、烏が啼けば髪化粧して部屋から出で、夕日斜めに射す頃にはもう御前を退つて部屋に戻る、隔夜の御夜詰めには御間ひとつ隔てたお控への間で、無邪氣な兒小姓を相手に續松双六の慰み遊び、これが話に聞いて籠の鳥のやうに思はれた宮仕へ御殿奉公であ

るのか、まあとんと自家にゐて、あの昔綱様と双六遊びをした時のやうぢや、又秀頼様も何所に淫らしいお心のあらうとも思はれぬ氣高い公方様である。それをまあ知らぬことゝして太閤様を引合ひに淫らしいお方であらうなどゝ思うたは勿體ない。聞けばこの身をお宮仕へとは名ばかりて、宛然お客様のやうにお扱ひ下さるも、皆そのお心づくしであるとは勿體ない。加之二言目には長門々々と仰せあつて、あの綱様を御弟君のやうにお引立て下さるお心は、まあ何所まで廣い有難いお心であらう

尾花は案じたよりも生むが易かつたことを先づ喜んだ。五日と經ち十日と過ぎるうち、勤めにも馴れ、御殿にも馴れ、氣心の善さゝうな朋輩も一人二人出來て、何氣苦勞のないその上に、暇の多い身は間がな暇がな、優しい、母様のやうな右京様のお側へ行つて、何くれと御親切な嬉しいお言葉を聞くことが出來る。もう此の上の願には、『小母上様』と呼ぶ右京様を、早く『姑上様』とお呼び申したい。

## （六）

秋も中葉の月高く空に澄み渡り、蟋蟀の鳴く音、遣り水の筧の音と涼しさを競うて、天地の情何となく淡き悲哀をふくむ夜、長門守重成は所勞引き籠り中の片桐市正を見舞うた。短檠の光り秋寂びの庭に流れて、

軈て寂しく散らん梧桐の下枝を照してゐる。重成は書院に案内されて暫し待つ間を廣椽近くにじり出て、四顧廓落たる中に何を思ふともなく、何時か茫然として我れを忘れてゐた。

『お茶まゐりませ。』といふ腰元の聲に驚いて我れに歸つた時は、恰度眞夜中の夢を不意に破られたやうな心持であつた。座に歸つて茶を喫つてゐると、紙襖は再び開いて且元の室一葉の前が挨拶にと現はれた。氣品高き中老の貴婦人がしとやかに座に着く其の蔭に、慎ましやかに差俯向いて引き添うたは誰ぞ。

『長門様、御多忙中ようこそ御入來下さいました、直ぐにも主人お眼にかゝるのでございまするが、暫く臥り居りました故、そのまゝ御對面も失禮と存じ、只今仕度を整へて居ります。』

『これは、突然夜中お訪ね申して甚だ失禮に存じまする、殊に御所勞中某し御病床のお次ぎへ參つてと存じ居りましたに、態々御起床下さいまするとは、尙更以て恐縮にございます。その後御容態は如何でございまするな。』

『有難う存じます。もう餘ほど怠りました故、この分では近いうち登城かなひまするかと喜び居ります。主人の缺勤中お役目殊更御大儀と恐察致します。』

『我等若年の未熟者、市正殿御缺勤中は宛然暗夜に燈火を失うたやう。皆々一日も早き御快癒を祈り居ります。』

一通りの挨拶が濟むと、一葉の前は傍へに引き添うてゐる者を顧みて

『長門様へはまだお目通致しませぬが、これは不束の娘蜻蛉でござります、以後お見知置き下さいませ。』

母が紹介せの言葉に續いて、蜻蛉は優しく手をつかへて、

『長門様、どうぞお見知りおき遊ばして……。』

『左様でござりますか。これは、某し木村重成と申します、手前よりも何分宜しく。』

一葉の前は向き合つて挨拶する重成と我が子とを笑ましげに眺めて、

『お聞き及びかは存じませぬが、平素は御殿へ參つて居ります。今日は父へ見舞のお使者を兼ねて一日退つて參りました。身體は大きうてもまだ年齢の參りませぬ所爲か、ねから物の役に立ちませず、大奥に在つても嘸ぞ皆様の笑はれ者になつてゐようと存じます。』

斯う云ふ挨拶には餘り馴れぬ重成は、何と返答すべきか頓に言葉が出なかつた。兵法を議し戰術を論うては千言萬言淀みなき雄辯の長門も手持無沙汰の間ふさぎに、冷めた茶を味もなく喫るのが關の山であつた一葉の前は流石に世馴れたもの、客に無言の行をさせては失禮と、又語

り出す。

『時々お越し下さいましても、その樣な譯で家には居りませず、偶々退つて參りました時には貴方樣はお見えがなく、家中は斯うして御別懇に願うて居りましても、蜻蛉だけは除け者同樣でございました。申すも失禮でございますれど、長門樣は堅田に生ひ立ち遊ばした故、石山寺や三井寺のお景色はよう御存知、何時ぞは母と一緒にそのお話をお聞きしたいなどゝ申して居りました。此所から近江へのことでございますれど、蜻蛉はまだ近江八景は繪卷で拜見致したばかりでございます。』

輕口のペチャ〳〵ではなく、何所までも氣品を崩さぬ一葉の前の言の言ひやうには、重成は何時も感服してゐるのである。

『左樣でございますか、大阪へ參りましてからは時々近江八景を稱讃して聞かされますが、幼少の折朝夕眺めました景色は、他の人から然う言はれて始めて然うであつたかと振り返るやうな始末でございます。でも唐崎の松並木を夏の日の夕映を背景にして、漁舟の上から眺めた景色だけは、今も眼の前に浮びまする。恩師は殊にこの景色を愛でましてゝ、某し夏の夕暮よく釣りのお供を致しました。』

『まあ、左樣でございますか。』

『石山寺や三井寺の供養は中々有難いと聞いては居りますが、遂に拜觀

致したことがございませぬ。でも、菜種の花の咲く頃、寺々へ通ずる野路を、御詠歌を流して行く巡禮姿を見た時には、佛門の身ならねど、染々彌陀の慈悲を思ふこともございました。』

言葉短かな話ながら相手を恍惚とさせるやうな重成の話振りを、一葉の前は聞きしに違はぬ話上手よと舌を卷いて聞き、蜻蛉姫はその巡禮者の御詠歌とやらを聞くやうな心持で只だ恍惚となつた。御殿で朋輩衆が長門樣が何うの、横綱の綱樣が斯うのと、よう聞かされる其の長門樣の綱樣は、今こゝにおゐでぢやと思ふけれど、何うしたものか頸の筋が硬張つたやうで顔が上らぬ。

『殿樣がお出ましでございます。』と腰元が紙襖際に手を突いて知らせる聲。

『あれ、もう父樣が……』ではもうお話は聞くことが出來ぬと、不圖上げた顔を、

『あれ、長門樣が見てござる、』やらざらぬやら、それさへ見分くる間もなく、又伏眼になる乙女氣の、胸に打つ波知るや知らずや、一葉の前は長門に會釋して、

『どうぞ御ゆるり遊ばしませ。』と蜻蛉を連れて奥へ這入つた。入り交へて片桐且元、六十の坂に近い老體、面窶れした口元に軟かな笑を洩しな

がら、衣紋正しく着座して、

『ようこそ、お待たせ申して御無禮しました。』

『御所勞、其後餘ほど怠りました由、何よりと存じます。チトお見舞に參らねばならぬとは存じながら、多用に取り紛れまして。』

『いや、決して御配慮下さるな、さしたる病氣ではござらぬ。それよりも其許日々の御出精御苦勞に存ずる。』

『お言葉恐縮に存じます。若輩物の役にも立ちませぬを種々御教導に預りまして……此後とも何分お心添のほど願はしう存じます。して今宵突然伺ひましたるは、平素御無沙汰のお詫びは第二、本日上樣より内々……』と言ひかけて四邊に氣を措き言葉を切る。旦元それと悟つて、

『誰ぞある、蔀おろせい、雨戸ひけ。』

はッと應へて腰元二人、早速廣椽先の雨戸を引き、蔀をおろして退る。

重成は一膝乘り出して、

『本日御前へ伺候致したる所、上樣仰せには、天下の情勢現在の如く、大阪關東の中合今日の如くんば、こゝ五七年の間には必ず軍馬動かざるべからず、それにつき……』

『領分境を巡見し、又關ヶ原の一戰後關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺へる、眞田、後藤らの武將に令を傳へよとの仰でござらう。』

『すれば、市正殿にもその御仰せを承つてござるか。』

『いや、その御仰せを其許に下さるやう、過ぐる日内密に申上げておき申した、この大役爲了する者、某し眼には其許より他にござらぬに依つて。』

『して、上様仰せは、眞田、後藤、其他大阪に恩ある諸豪傑の隱遁所は旦元の手にて調べある筈、委細は市正と談合致せと、斯様でござりましたる故、夜中又御所勞中をも顧みず押して推參仕つたる次第。』

旦元は笑ましげに打ち頷き、やがてッと起つて奥より小さな手帳やうのものを持ち來り、

『先づ、信州上田前の城主眞田安房守が、二男左衞門佐幸村は、今は九度山に隱れ忍んで、朝雀晩鴉を友として鍬を執つて居るが、音に聞えた智勇兼備の良軍師。まつた怪傑後藤又兵衞基次は、南都を去る一里法華寺と云ふ町に隱れ住んで居る筈。其他はこれに。』と木村に手渡す古手帖、

是れぞ旦元が年來苦心して機脈を通じおいたる太閤恩顧の忠臣が、世を忍ぶ假りの住居、假りの名前の覺え書である。重成は有難しと押し戴いて懷中なし、

『このほど關東より五畿内の諸社寺普請、及び方廣寺大佛造營のこと申來りし由、それは眞事でござりまするか。』

『如何にも、家康にとつて怖きもの先づ第一に南山不落の大阪城、第二に朝鮮軍以前よりの恩顧の武將、第三に城内に蓄へある軍用金。第一は老功の家康如何に肝膽を碎くも手の下し様なけれど、第二、第三は彼種種の計畧を以て除き去らんと致し居る。見られい、太閤恩顧の諸將が年一年と大阪を離れて關東に赴くではござらぬか、これ皆な家康が暗中にて手繰る絲あるがため。又此度五畿内諸社寺の普請、方廣寺大佛造營の申込みは、第三の軍用金を費ひ果させんため……恩顧の將士皆な離れ軍用金殘り少なになつたる時こそ、彼れが虎狼の爪牙を表面に現はす時でござる。南山不落の堅城も、守るに死を怖れぬ將士なく、支ふるに糧米軍用なくんば、いかで一日を保つを得べき。旦元不肖といへども、之れを憂へ、關東が繞らす計畧の裏の裏行かんと百方苦心すれど、如何せん、織田有樂の愚、長曾我部宮内が邪、大野一家の小智短才、是等社鼠の輩が言ふことのみを御信用遊ばす淀君様……あゝ、太閤殿下が大明國までも轟かした御威武、斯くも早く地に落ちんとはするか。』英雄は英雄を知るとか、赤誠の忠臣は若き忠臣と相對して思はず深き述懐を洩した。短檠の燈搖れて、兩雄相語らざること多時。

『いや、どうも老人の愚痴をお聞かせ申して嘸ぞ御迷惑にあつたらう。して御事御出立は何時でござるな。』

『寸善尺魔と申すこともござれば、直く樣明日出立致したいと存じ居ります。』

『して、その路順は。』

『先づ河内路を暗り越して南都を指して參り、後藤どのには先年恩師の許に在る時一度親昵にもなり居りますれば、それへ訪ねて參りたいと存じ居ります。』

『何樣大役にござれば、大事にも大事を取つて。』

『何から何まで御配慮かたじけ無う存じます。然らば是れにてお暇。』

『お引き留め申したいが、明日の御用意もござらうから……』

主客が別れの挨拶を交はしてゐる時、雨戸の外、廣椽の床下からヌッと出た雲突くばかりの大入道があつた。耳まで割れてゐるかと思はれるほどの大口を一文字に結んで、小氣味よげに頬笑み、大眼球の鋭い光りを四邊に放ちながら、ハ、ハ、ハ、と抜足して、庭の木立の茂みに隱れた。

あとには蒼い月の光りが流れて、梧桐の一葉風もなきにホロ〳〵と落ちた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

片桐邸に於ける兩雄が密談と時を同じうして、長曾我部宮内が邸の奥

座敷に於ても秘密會議が開かれた。先づ會合者の顔觸れを見よう。

薄暗い懸燈の眞下で、手焙りの火鉢傍へに寄せてゐるのは、蔭影の具合で窪んだ眼は一層深く、尖つた頰骨は一層高く宵に手枕の轉寢したのか寢くたれ髪がおどろ〳〵しく耳から頰にかゝつてはゐるが、まがふべくもあらぬ山瀨である。背後に立てた突立の墨繪の大松の間から、若し羅城門の軒甍でも覗いて居つたら、差詰め渡邊の綱どのに出て貰ひたい幕であると、思うて見ると、左斜めに大胡座をかいて、毛虫のやうな眉を時折ピコ〳〵動かいて居る二人の法師も、殊勝げなその香染めの法衣を剝ぎ取つたら、虎の毛皮の褌を締めて居るのでは無いかと疑はれる。

そこで法師と差向ひにこれも大胡座をかいた野武士然たる奴を、地獄の一丁目の四條河原の六尺高い死刑場の張番と見立てたら、これで先づ顔は揃うた譯である。

『御坊の大變遲いことのう。』と法師の一人は哮えるやうな濁聲で云ふ。

『大將餘り圖體が大いで、庭の切戸を潜り損うて……』と地獄の一丁目が唸り出すと、

『うゝン、南無遍照、緣喜でもない、我等がお頭ぢや、何扳りがおンざろ。』と今一人の法師が念佛まじりに打ち消す時、

『はゝゝゝ、先づはそこらぢや。』と紙襖手荒く開けて入つて來た大入道

これぞ片桐邸の椽の下へ蜘蛛の巣を被つて潜つた奴。

『何ぞ聞き込んだことがあつたかえ。』と羅城門ならぬ突立の前の山瀬が小膝を乘り出す。

『有りまいたぞ、有りまいたぞ、小冠者め、明日早速旅立ぢや。』

『して、旅立は何れへ？』

『先づ、河内路を暗り越して南都を指して參り、後藤どのには先年恩師の許で親昵にもなつて居りますれば、それへ訪ねて……てなことを、この因幡がお臀の下で聞き居るとも知らいで、迂濶々々と吐し居つた。』

天晴れ一世の英雄が、凱陣の功名手柄を物語るやうな得意面で、横に廣いだん鼻を己れの胡座よりも根張らせた。

『ほう、それは好いことを聞き込んだ。今日珍柏の密告に、重成め御前で何やら内命受けたとのことに、なほも様子を探らせてゐると、夜更けて片桐邸へ出かけるとのこと……』と山瀬が云ふを因幡は横どりして

『そこで我等が忍び込んで、先づは功名の手初めぢや。』

『尾花の小女郎は、淀様を持ち上げてまんまと城内へおびき寄せてある

これで重成めを亡い者にすれば、堅田以來妾の恨みは晴れる、鳶が望みの女は手に入る……』

『そこで片桐と大野一家に同士討ちさせて、もう大阪に眼の開いた奴が

無くなれば、……』

『攝河泉六十餘萬石は、表面は豐臣家のものでも、内證は此方のもの……』

『こりや、徐々運が向いて來居つたわい。』

『お局、前祝ひは何うでごはす。』

『ほゝ、葷酒山門に入らずの行を積んだゞけに、二言目にはハンニヤたうが出ますわいのう。』と山瀨が亂杭のやうな齒をむき出して笑ふ。

『こりや、眞綿で頸ぢや。』と法師ども頸を縮めて頭を抱へる。

『用意の酒肴、出しませい。』

『かう來りや可愛いぞ。』と早や車座になる。と、跫音ドッタバタ、駈け込んで來た一人の若衆、片肌脱ぎになつた濃い紫の長絹姿慌たゞしう

『叔母上、私やもう堪らぬ、あの女役者……』といふ顏を、山瀨最初は笑つて見てゐたが、やがて少しく怒氣をふくんで、

『これ、鴉之介、何をいふ、それほどの我慢が出來いで、やれ尾花御が欲しいの、やれ綱千代が憎いのと、それは餘り身勝手といふものぢや。』

『でも、踊や芝居の稽古はそつち退けにして、私の顏さへ見りやじやらつきくさる。』と鴉之介はその女役者といふのが追つかけてゞも來るやうに、後ろを振り返りながら肌を入れる。

『ばゝゝゝ、女難厄難か、色男には生れて來ぬものぢや。』と因幡坊が大口開いて笑ふと、

『したが、男と生れた甲斐には、一生に只つた一度、只つた一度でえゝから、困るほど女に惚れられて見たいよのう。』と地獄の一丁目が心から羨ましさうに云ふ。

『したが、鴉どの。』と因幡は眞面目顔になつて、『これも其方が愛しい尾花御、此方のものにする手段ぢやと思や何でもおざるまい。こゝらの坊主は圓い頭に椽の下の蜘蛛の巣を被いでも、出世の緒ぢやと喜んで居るわさ。さ氣嫌直して稽古ぢや、稽古ぢや。』

右左から言ひ聽かされ、たしなめられて、鴉之介は又悄々と以前の部屋の方へ行く。

『戀のためには歌舞伎踊の役者にまでなりなさるか、さても戀は魔物ぢやわい。』しほらしい述懷は誰れの口からぞと一同が眼を睜る所へ現はれたのは、此の家の主人盛親に案内された正榮尼であつた。

『これはまあ思ひがけない正榮樣、この夜中に何うして？』と訝る山瀨をさもあらんと言ひ顏に見ながら盛親は座について、

『其方も知りやる通り、正榮殿御二男銀之丞殿に、市正殿娘蜻蛉を貰ひ受けんとせられたが融通の利かぬ市正、木で鼻くゝるやうなにべない

挨拶ぢや。末子の可愛さは誰れも同じことで、正榮殿其後それを苦にせられて、何うかなしてと思案の餘りに、今日この宮内に御相談のかけられた。かねて御別懇に願うて居る正榮殿がこの御心配を餘所に見るにも忍びぬで、今宵の密議を云々と打明け、片桐邸の模樣に依つては、又好い手蔓もあらうからと、時刻を計つて私がお迎ひして來たのぢや。』

正榮尼はその尾に續いて、

『聞けば此方にもそれにより似たことがあつて、それ〴〵の手配りぢやさうな、歌舞伎踊の一幕で淀樣を圓めなさるには、もう山瀨どのお一人で澤山ではあらうけれど、この尼がちよつぽいくさ饒舌ることも、淀樣には大分御利益がござりますゆゑ、こゝはひとつ助けつ助けられつで、尾花御も蜻蛉姫もそれ〴〵嫁女に取つて遣り、それを幸先に此の後のことは何くれと力を合はせたいと存じます。』

『これはまあ、正榮樣のお力を藉りまするなら、此方の目論見はもう九分通り出來たも同じぢや。何の蜻蛉姫を手に入れる位、いと易いことでござります。』

『ほう、容易う手に入りますかい。』

『入りますとも、それでは宮内殿斯うしませうわい。刻先因幡どのが聞き込んで來ましたには、重成めは明日奈良へ向けて旅立ちするさうなか

ら、これを途中で亡いものにすれば、歌舞伎踊の一幕はさう急ぐことも要らぬに依つて、先づ正榮殿に手をお藉し申して、蜻蛉姫の方から取りかゝつては何うでござりますぞえ。』

『ふム、それはよい思案ぢや。して重成めは確かに奈良へ旅立つといふか。』

『我らがこの耳朶に確かと聞き申した。』

『それでは三人の者、御苦勞ぢやが今宵これから先き廻はりして……こりや、奥、秘藏の種ケ島、持つて來や。』

山瀨は起つて奥から種ケ島を取り出して來る。盛親受取つて、

『因幡どの、一ッ外れても亦一ッ、これは種ケ島の二聯發ぢや。首尾よく仕遂げりや褒美は何でも望むに任せる、萬事扱りなく。』

『心得まいた。坊主三人寄りや三僧ぢや、范增ほどの智惠も勇氣も出居らうわい。』と洒落まじりに吐いて起ち上つた。

（七）

初秋の涼しい風は肌寒になり、やがてそれは身を切るやうな木枯と變つた。

關東との御仲合兎角に面白からぬ風説に包まれて氣の早いものは、『冬

のうちには軍が始まるさうぢや。』などゝも言つたが、それほどでもなく先づは芽出度き春を迎へられるであらうが、風説は風説を生み、取沙汰は取沙汰を喚び起して、大阪城中の老若男女安い心とてはしなかつた。

『これ〳〵、花野どの、待たしやんせいな。』

『何ぞいな、錦木どのゝ仰山な、不意にそんな大きな聲して、私や膽をつぶしたぞえ。』

『さ、その膽をつぶすのはこのさきのお長廊下でござんす。晝中通つても草履の音に後ろ向きたうなるのに、この黄昏時、私や一人で何うせうかと、思案ながら來かゝると其方の姿、やれ嬉しやと思ふたでッゝあの



樣な大きな聲、おゝ安堵した。』

『さう言はれると、私も何うやら足が重うなつた。』

二人の腰元が言ひ合はしたやうに立ち止まると又一人、

『これ〳〵待つてたもれ。』とバタ〳〵と駈けて來る。二人は見迎へて、

『小車どのも今お退りでござんすかえ。』

『さいな、今日は眼の廻はるほど忙しうて、おゝ心勞、お退りのお許しが出たと思やもうこの黄昏、私やお長廊下が氣味惡いに依つて、吉野どのを待ち合はさうとしたら、生憎なお夜詰め、まあ何うしたら好からうかと怖わ怖わ此所まで來たら……おゝ安堵した。』

『時にお二人さん、御前様は近頃夜もおち〳〵御寢なさらぬといふが眞實かいな。私がお夜詰めの時はその樣な御樣子も伺はれなんだが。』

怖いもの見たさの心理の作用で、錦木は二人の方へ窃と摺り寄りながら訊く。

『それは眞實でござんす、時たま御しづまり遊ばすかと思ふと、なア花野どの、昨夜も恰ど子の刻過ぎ……。』

『おゝ氣味わる！』

と三人は思はず眼を圓うして手を握り合ふ。

『そんなら矢張り噂の通り、關白さまの怨靈や御臺さまの幽靈が、あの本當に出るのかいな。』

『さア、見ぬことゆゑ何とも言はれぬけれど、それは〳〵氣味のわるいお唸り聲。』

『えゝ、そんならお長廊下をスウッと通ると云ふのは眞實かいな。』

『まあ錦木どの、おかしやんせ、只ださへ氣味わるいにそのやうな聲。』

『まだそればかりぢやないぞえ、三日ほど前の晩、お天守の上に怪しい黑煙が渦まいて、お星がすべつたの、箒星が見えたのと、怪態なことばかり。』

『これは何ぞ變事のある兆ぢやと、圓觀上人さまのお話。』

『怖しい軍でも始まるのではなからうか。』

『さ、それで、この間から御領内百ケ寺にお布施して、怨靈退散、諸事安穩の御祈禱を、内々上げてゐるとのことでござんすわいな。』

『そして斯樣な折には故さらに取り鎭めよ、狼狽た態があつてはならぬとの仰せで、近いうちには何か賑やかなお催しがあるさうな。』

『おゝ、それ〳〵、今日山瀨どのが御前樣に申上げてゐましたには、何でも歌舞伎踊の上手な役者を呼び寄せておいた故、その催しでもして、城中の者の鬱つた心を晴すが宜からうとのことに、御前樣にも大分お氣乘りの御樣子であつたから、近いうち面白い歌舞伎踊が見られうわいのう。』

三人は暫く立話に氣を取られてゐたが、話もつきて、さあ行きませうとなると、誰れも皆な眞中にならうとして、どうぞお先きへ、どうぞお先きへと讓り合つて果しがない。

『そんなら斯うしませう、先頭になる者は此方向きになつて、二番手の者と手を握り合ひ、後から行く者は前の者の帶に取りついて、斯う三人がまさかの時にも離れ離れにならぬ用心して。』

『ほんに、それは好い思案。したが小車さん其方言ひ出したからには、先頭でござんすぞえ。』

『それは沒義道な、思案をかしたから私は眞中ぢや。』

『その樣な身勝手なこと。』

『そんならイッソのこと狐拳して、負けたものが先頭になりませうわいな。』

三人は輪になつて、よい〳〵のよいと、狐拳を始めようとすると、バタ〳〵と駈けつけて來た茶道の珍柏、吃驚して尻餅つく三人の上に轉げかゝつて、

『たゝゝゝ大變ぢや、大變ぢや。』と面白半分に其所等あたりを這ひまはる。三人の腰元は怖い怖いと思つてゐる所へこの慌たゞしさであるから氣も遠くなるほど吃驚して、頓に口も利かれない。珍柏はやがて三人の顏を薄暗りにまじ〳〵と見て、

『やあ、これは何うやら眞の人間らしい。』

『ひえー。』

『やれ〳〵、怖や怖や、お蔭で命を三年縮めた。』

『お茶道、大變とは何ぞ出たのかえ。』

『出たとも〳〵。』

『ひえー。』

『もう大丈夫々々、愚老が來たからには何も慄へることはござりませぬ

さあお起ちなされませ。』

『さう云ふお前もがた〳〵慄ひしてゐるぢやないかいな。』

『これは、その今鳥渡……』

『鳥渡どうしたのぞいな。』

『なに、その、今、暮方聞いたひゝんな噂を思ひ出いて、あゝ物騒な世の中になつて來たと思ひながらお長廊下の眞中まで來ると、これ、そのやうに獅嚙みつかれては愚老の身が持ちませぬ――その、お長廊下の眞中まで來るとな、生溫い風が何所からともなくスウッと……』

『ひえ――。』

『あいた、あいた、これ、そこは愚老の股藏ぢやがな……その、生溫い風がスウッと吹いて來たので、總身がブル〳〵ッとして、耳の孔がヂヤーン、と云ふたと思ふとな、これ聞かしやりませ、鼻の前を、影とも象ともつかぬ、さうぢや、恰ど、朧月夜の、柳の蔭の、燈の消えた、雪洞に、灰色の羅物、を掛け、た樣なものが、ギロ〳〵、と眼を光らかいて、スル〳〵〳〵……暮六ッのお太鼓が、ドーン、ドーン。あいた、あいた、これ睾丸が千斷れるがな、千斷れるがな。嘘ぢや、嘘ぢや……おゝ、堪らぬ、眼から火が出るほど痛かつたぞや。』

『そんなら今のは嘘かいな。』

『あゝ、嘘ぢや、嘘ぢや。餘り皆樣が怖がるに依つて、まさかの時の用心に、鳥渡膽試しをしたまでぢや。』

『えゝ、何ぞいな、戯れするに事を缺いて……』

『えゝ口惜しい、この返報どうして呉れよう。さ皆さん、右左から擽ばかして今の返報。』

承知々々とおつ取り卷くと、珍柏今度は眞面目になり、

『あゝ、待つた〳〵、待たしやれ〳〵、今のは全く嘘ぢや、愚老が惡かつた、降參々々。したが、これは嘘でも笑談でもない、と云ふのは、その先刻云ふた、晝間聞いたひよんな噂ぢや。』

『えゝ、又騙さうとて。』

『なんの〳〵、もう眞面目ぢや、大眞面目ぢや、今日正午過、御表の東の詰所の前を通りました所、誰樣の御家來衆かは知らぬが二人立話、愚老の顏を見るとピツタリ話は止めたが、小耳に挾んだのは、長門どのが河内路で山賊に討たれたといふ一句。餘ぽど傍へ寄つて尋ねようかと思ふたが、此方の顏を見て口を止めるほどぢやもの、どうせ聞かしては呉れまいと、そのまゝ通り過ぎましたが、自體眞實でござりませうか、皆樣はそんな噂をお聞きなさりませぬかえ。』

『まあ、些つとも知らぬ。花野どのはえ？』

『私も聞かぬ、小車どのはえ？』

『私も初耳でござんす、まあ。』

珍柏は此所ぞと言ひ顔に、

『何でも關東へ返り忠をする者が、家來を山賊や野武士に仕立てゝ御領内を横行させ、何かの秘密を關東へ持つて行くさうなゆゑ、若しやさう云ふ者の手にかゝつたのでは無いかと、内々心配して居ります。木村様のやうな忠臣が亡くなるのは、お城の櫓を二つ三つ潰いたよりも惜しうどざりまするでな。』

『まあ、なあ。』

『ほんに、なあ。』

と三人の腰元は半信半疑の雲に包まれながらお長廊下の方へと行つて了つた。後見送つた珍柏、して遣つたりとペロリと舌を出して、

『先づ斯うしておけば、あの口のお達者な三人ぢや、それからそれへと言ひ傳へ言ひ觸らして……したが、斯んな噂を立てゝいと云ふ山瀬どのや正榮尼殿、何ぞ又古猫のちよつかいを始めたと見える。でもこれだけのことをするにも、小判といふものを澤山と下さる。かうして彼方からも珍柏、此方からもお茶道珍柏、お茶道、珍柏、お茶道……ひえ——出た、出た。』と不意に柄にもない黄色い聲を立てゝ尻餅ついた四五間彼

方を見ると、ヌッと棒立ちになつてゐる者がある。珍柏は起たうとしてはバタリ、起たうとしてはバタリ。

『や、さう云ふ聲は珍柏、私やお前を探し廻つたぞや。』

『なゝゝなんぢや、銀樣かい。やれ〳〵、吃驚、癪驚、消し飛んで了ひましたわい。』

『何の吃驚することがあろ、私やワッとも何とも云はなんだぞや。これ珍柏、おぬしに賴んでおいたことを今日まで返辭せぬは、私を馬鹿にするのぢやな。』

『はゝゝゝ、馬鹿にするが大出來ぢや、何の馬鹿にしませうぞいな。』

『いや〳〵、馬鹿にするのぢや。第一笑ふとは何ぢやい、人が腹を立ッとるに、笑ふとは何ぢやい。』と銀之丞は脇差の柄に手をかけて、詰め寄る。

『あ、これ〳〵待つしやれ、待つしやれ、何ぞといふと刀の柄、お前樣はどうも氣が短い。さう氣が短うては蜻蛉どのが厭ぢやと云はしやりますぜ。』

『そんなら刀は抜かぬに依つて、この間云ふた首尾とやらいふものを早うして呉れ。』

『はゝゝゝこれは眞向で恐れ入つた。その首尾はな、何やらにつける藥

を買ふてからでござりますわい。』

『いや、いかぬ、その藥の代ぢやといふから、私は母者の手筐から小判を取つて來て、あの樣に澤山と遣つたでは……』

『あつと、これ〳〵、皆まで云はいでも分つとります、あ、さう〳〵、藥はチャーンと買うてある、ぢやに依つてな銀樣や、今度お前樣蜻蛉どのに會ふたら斯うなされ……え丶ト……』

『でも、私が何ぞ云はうとすると、蜻蛉どのはツイつうと起つて去にやるものを。』

『さ、それはお前が下手な故ぢや。そうツと後ろから忍んでゆき、先づ羽がひ締めと云うてな、斯う云ふ鹽梅式に抱き締めて、それから、やいの〳〵と根氣よく口說くのぢや。』

『さうすりや蜻蛉どのが優しう云うてたもるかいの。』

『ウ丶、たもるとも〳〵。おッ、あれ〳〵、噂をすれば影がさす、あの雪洞は蜻蛉どのぢや、よしか、羽がひ締め、解りましたかい。』と、珍柏はコツ〳〵ともと來た方へ小走りに引返す。銀之丞は只だウロ〳〵、マゴ〳〵。

廣い御殿の長廊下には、薄暗い懸燈がまばらに燈つてゐる。

## （八）

『ほんにまあ飛んだことでございました、お怪我ばしございませなんだかいな。』と優しう言ふは尾花、言はるゝは蜻蛉。

『尾花さま、どうも有難うございました。ほんに私は何の因果で……』と思はずホロリと熱い口惜し涙をこぼした。

『あの様なお方でございます故、誰ぞにけしかけられて來るのでございませう。以來は私もなるたけお側を離れぬやう致します故どうぞ御安堵なされませ。』苗鹿の森で十四歳の時、守刀を逆手に持つて、大入道の因



幡に立ち向ふた氣丈な尾花姫は、先刻お長廊下で蜻蛉を追つ駈け廻はす銀之丞を突き退けて、斯うして勞はりながら部屋まで歸つたのである。他の腰元衆とは大分年齢の違ふ尾花は、一ッ年上の蜻蛉が氣立も優しく取りなしも柔和で、尾花さま尾花さまと親切にして呉れるので、尾花も奥底なく慕ひ寄つて、世に私のお姉様といふものがあつたら、屹度斯ういふお優しいお方であらうとさへ思うてゐる。その蜻蛉に薄馬鹿の銀之丞が煩さく附きまとふてゐると知つては、氣丈の尾花は我が身の難儀でもあるやうに、心の底から口惜しいと思ふのであつた。

蜻蛉は軈て懷紙に涙を押し拭うて、

『な、尾花樣、貴方も私も腰元中での年若ゆゑ、何かにつけて皆樣のお笑ひを招くやうなこともあつて、染々お宮仕へが辛いと思ふことがございまする。なあ加之又この頃は何うした譯ぢやゝら皆樣が以前にも增して素氣なうなされて……私やもう、尾花樣、貴女がゐてぢやなかつたら……』と、蜻蛉は又さめ〴〵と泣くのであつた。

『蜻蛉樣、お心のうち御推量申上げます。私も傍に見てゐて皆樣の素氣ない爲され方をよう知つては居りますれど、年のゆかぬ私が何と申さうやうもなく、只だ默つて見て居りまする私の胸のうち……』と情に脆い尾花姫は既胸が一杯で口が利けなくなつた。

蘭燈影淡く、伽羅の香高き几帳の蔭、音にこそ立てね蜻蛉が、羽衣ならぬ振りの袂に顏を蔽ふた態、瀧津瀨と下る涙の露に袖絞る尾花が姿、彼れや愛惜しき、此れや可憐なるべき、折しも廊下を巡る火の番の打つ拍子木の音、彼方に遠く微かに聞えた。

『尾花樣、貴女の優しいお心は、私や死んでも忘れは致しませぬ。由ないことを言ひ出して泣かせました。さ、もう私は泣きませぬ。』と蜻蛉は泣き伏す尾花を抱き起して、涙に汚れた白粉の顏を、懷中紙取り出して優しうも拭いてやりながら、

『私ばかりではない。この頃は何うやら貴女にも皆樣は素氣無さうでご

ざりまするゆゑ、此上ながら共々お力になりませうわいな。さ、これで綺麗になつた。もう悲しいこと云ふのは止めませう。』

いたいけな尾花の顔を直してやり、我れも懐鏡取り出して覗く顔、そも誰れに見せうとての躾みぞ。

二人は軈て手を取り合つて部屋を出た。

『三笠どの、饗庭様がお見えになりましたら、尾花様と二人で右京様の許へ参りましたと、どうぞお傳へ下さりませ、憚りさま。』と蜻蛉は隣りを覗いて言葉叮嚀に頼んだ。

二人は今宵右京の許へ遊びに行かうと、晝間約束を結んでおいたのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『小母上様、蜻蛉様と連れ立つて遊びに参りました。』

『お局様、お邪魔に上りました。』

と何れ劣らぬ蕾の花が、水をふくんだ風情に、押し並んで手を突いた

『これはまあ、仲好しのお二人、さ、ずつと此方へ進みや、昨日は一日お二人とも見えなんだゆゑ、今宵は大方ござらうと思うて、待ち心で居りました。日々のお勤め、御苦勞でござりますのう。』右京は心から溢れ

る笑みを湛へて迎へるのであつた。

『私達は若い身でございますゆゑ、さほどでもありませぬが、お局様こそ、嘸ぞお草臥れでございませう。』と蜻蛉は年上だけに、言の言ひ振り何所か尾花よりも大人びてゐる。

『小母上様、何時ものやうにチトお肩でも揉みませう』と尾花は早や右京の背後へ廻はる。

『さうでござんすか、それでは御苦勞ながら……さ、蜻蛉どの、も些つと此方へ寄りや。』

右京は手焙りの桐の丸火鉢を少し押し遣つて、『時に蜻蛉どの、尾花どの、つかぬことを聞くやうなれど、お二人今日何ぞ變つた噂は聞かなんだかいのう。』片頬に笑みは見せてゐるが、額には隱されぬ憂ひの雲がかかつてゐる。蜻蛉と尾花とは顔見合はし、小首を傾げて、『左様でございます。私は別に變つた噂と申しましては……』

『聞きませなんだか。では尾花どのはえ。』

『私も別に聞きませぬでございますが……』

『はて、もう御殿では皆取沙汰ぢやと聞きましたに、妙なこともあるものぢや。』

『變つた噂とは、何のやうな……』

『さ、私も只た今しがた聞いたばかりなれど、綱千代の身に變事が……』

『えッ。』

『綱様の。』

二様の驚きの言葉は、二人の乙女の口から同時に發せられた。蜻蛉は膝を進める。尾花は肩を揉む手をピタと止める。穂にこそ出さね、思ひは同じ二人は、總身の血の循還も止まつたかと思ふほどに驚いたのである。

『さ、これは錦木どのや花野どの小車どのが先刻知らして呉れましたこ



となれど、私は何のことやら些つとも解らずにゐるのぢやわいの。綱千代の身に變事があつたと御殿中の者が取沙汰してゐると云ふに、私の耳へ只つた最前入ると云ふも不思議、又兄妹も同様親しうしてゐる其方達が些つとも知らぬと云ふも不思議。これ、お二人、此方へ寄りや。』と右京は二人をなほも身近く寄らせて、小聲になり、

『この御殿にはな、それは〳〵怖ろしい悪者が蔓つてゐて、根もないことを言ひ觸らしたり、又種々なことを企んで、人々の心を攪き亂さうとしてゐるに依つて、この後とも隨分氣をつけてな……兎角悪者には眞心の人、忠義の人は煙つさいゆゑ、何のやうなことして害を加へまいも

のでもない。饗庭樣も私も夜の眼を合はさず大奥へ心を配つてゐるし、又表衆では蜻蛉殿の父御を始め忠義の人々が充分心を配つてゐやしやる故、追付け證據を押へてその惡者に繩うつことが出來うが、何にもせよ心に油斷をせぬが肝心でござんすぞえ。』

右京はなほも聲を潜めて語り續ける――お天守にこの程物怪が現はれたと云ふも、今云ふた人々の心を攪き亂すための惡者の仕業であらうも知れぬ。それでなければ愈々御家に變事のある兆であらう。又關東との御仲合今日明日に軍を見るやうなことを、野田福島の渡守、さては天滿川崎の市女までが、寄ると觸るとに噂し合うてゐるといふのも、御家の大事を思はず、只だ私の權勢を張らうとする大野一派の者の爲る業であらう。それこれで人々の心も何とやら穩かならず、『殊に其方達の身の上に目を注けてゐる惡者もあるゆゑ、萬事によう心して、な。』

『足はぬ身を猶も慎みまするが、お局樣、小母上樣、この後ともにどうぞ……』

『おゝ、娘のやうに思うて居る其方達ぢやもの……さゝ、もう斯う云ふ話は止めませう、誰が立聞くまいものでもない』右京は思ひ出したやうに火鉢に手を翳して優しく二人の顏を眺める、尾花は起ち上つて、

『御療治はまだ半分でござりましたゆゑ、もう少しお揉み申しませう。』

『尾花様、今度は私がチトお代り申しませう。』と蜻蛉も靜かに起つ。

## （九）

世に美しといふものあらば、それは戀を知り初めた乙女子が、戀しい人の身を案じて、夜もすがら、燈火の蔭で千々に碎くその心であらう。秋の初めの或る一夜、父の病氣を見舞にと、御殿を退つて我が家を訪ねた折、圖らずも重成樣を見まゐらせた蜻蛉姫は、その後何うした譯ぢやゝら、凛々しいそのお顏、雄々しいそのお姿が、心に閃めき眼にちらついて、思ふとしもなき物思ひに、我れを忘れて時をすごすことが續いた空行く雁の群を離れて鳴く聲も、その時以來は身に染々と聞きなされ、桐の枯葉吹く秋風も泌み出るやうな涙を誘ふた。霜が氷に、みぞれが雪と變るにつれて、胸は思ひにもみ裏の、色濃くぞなるばかりであつた。宵に右京の局から聞いたあの方樣のお身の變事といふが氣になつて、臥床にあれど眼は眠られず、心は冴えて、見るともなく見詰める淡き蘭燈に、あれ、もう子刻の鐘の響が搖れて來る。

蜻蛉は眠られぬまゝに起き出でゝ、淡紅色緞子の寢卷着の胸高の扱帶ギユウと締め直して、雪のやうな素足の裾捌き靜かに文机の側へ歩み寄つた。高麗の花瓶に生けて日淺き寒牡丹が、なぜか一瓣ホロリと散りこ

ぼれたのを、スラリと起つたまゝ瞬きもせず見詰めた顔、枕の咎の鬢の亂毛三筋四筋、玉の頰にかゝつてゐる。暫しは大理石に刻んだ像のやうに身動きもせず立つてゐたが、軈て我れに返つて、机の側の手筐から一通の手紙を取り出してハラ〳〵と展げた。

木枯吹きすさぶ朝な夕な、部屋にゐて火鉢離さぬ身にも堪へがたきに火の氣すくない廣い御殿にての御つとめ、嘸ぞかしと毎日々々案じ上げまゐらせ候、何にも致せ、御からだ御いとひ被成度、わづらふてばし下されまじく候。

今日このごろ、上下の心何と無う騷がしう、穩かならず候よしに候へば、自然とやかうの噂、取沙汰いと煩はしかるべけれど、たとひ何のやうなこと人申し候とも御きゝ入れ候まじく候。をなごは何事にも差し出ぬが專一にて候。

そもじも今年はもう十七、十八の聲きくも直ぐのことなれば、早う良き婿をと、とゝ樣もかゝ樣も、それのみ肝煎り居りはべり候。

今年秋のはじめ、長門さまお來しの砌、とゝ樣はふと斯のやうなこと申され候、それは、長門さまは御心だてなり、品格なり、又武藝、學問、何から云うても、今大阪であのお年であれほどの者ふたりとは無し、あはれ蜻蛉が婿にあの樣なお方を御迎へ申すこと叶ふならばと

斯様に申され候、このこと今日までそもじに打あけまゐらさゞりしは情なきやうなれど、とゝ様のお心確と御聞き申さぬうちは、輕はづみすまじくと包み居候。このほどとゝ様のお心きゝまゐらせしに、よき折のあらば申入れてみんとまで申され候、嬉しきまゝ取り急ぎ知らせ上げ候。そもじ厭ならば厭と、今のうち申さるべく候……ほ、、、

長門さま今は何地へか御内命うけて參られ居候へど、とゝ様のもとへは度々お便り有之候、但しこの二十日ばかりは御手紙もあらぬ故、とゝ様も案じ居られ候。

何にも致せ、とゝ様かゝ様はこの様にそもじがこと、毎日々々案じ暮らし居候ほどに、慎みたる上にも身を慎み、ひと様に後ろ指さゝれぬ様、よう心して御つとめ被成べく候、かしこ。

母　か

かげらうどの

まゐる

今日の晝母からとゞいたこの手紙を、蜻蛉は晝間三度、今二度繰り返し讀むにつけても、胸の秘密を母に讀まれたやうな氣がして、見る眼なきにその都度顔を赭らめるのである。

それにしても宵に聞いた右京様のお話といひ、二十日ばかり御たより

が無いと云ふこの手紙といひ、若しや噂の通りお身の上に變つたことが
と思ふと、もう起つてゐてもゐられぬほど氣遣ひになつて來る。
一体何所へ何しに參られたのであらう？　御内命とあれば他の人々は
知るまいが、父様は知つてゐるに極つてある、母様も洩れ聞いて知つて
ゞあらう。いや〳〵、何他へ參られたかお知りなさらぬやうなこのお手
紙である、それとも斯んなこと私に聞かする要は無いとてのことか。そ
れにしてはあれ程のことをお知らせ下さるに、ツイ鳥渡何所々々へ參ら
れてゐると、書き添へて下されても宜さゝうなものぢや……したが私
はそれ聞いたとて、女の身で、奥づとめの身で、何うすることが出來よ
う。『おゝ、切ない、胸が張り裂ける！』
けれど、また思ひ返してみると、御城内の誰様へもお便りが無いに、
父様へだけお便り下さるあのお方に、そんな、そんな變事があつたのな
ら、誰れより先きに父様のお耳へ入るに極つてある。これは矢張り右京
様がお話の、怖ろしい惡者とやらの仕業で、根もない噂が立つたのであ
らう。さうぢや、さうぢや、それに違ひ無い、ほんに私は思ひ過して之
れだけのことに氣がつかなんだかいなあ、早う斯うと氣がついて、宵に
右京さまに然う申上げたら何んなに御安堵なされたか知れぬものを。明
日は朝早うにこのこと申上げて……したが父様の方へ度々お便りのあ

ることを何うして知りやつたと訊かれたら何と言はう？　母様の手紙に長門様のことが書いてあつたと云ふのもひよんなもの、さうかとて、其場つくろひな嘘を言ふのは罪ふかい……あゝ、困つた。

おゝ、それ〳〵、尾花様もいかい氣遣うてゐさんしたゆゑ、尾花様から云うて頂かう。あの方ぢやとて少さい時から一緒に育つて、お兄様のやうに思うておゐでなさるものを、私が斯うと知らして上げたら、どんなに御安堵なさるであらう、お喜びなさるであらう。ほんに私は幸せな戀しい長門様には父様や母様から添はして下さるし、あのやうにお優しい右京様が姑様になつて、あのやうに從順しい尾花様が妹になつて……

は取り止めもなき思ひに沈んで、時の移るのも知らずにゐた。嚴冬の眞夜中過ぎの寒さは、戀に燃える身にも容赦なく嚙みついた。蜻蛉はブル〳〵と身慄ひが出たので我れに歸つて、ソワ〳〵として寢床に入つた。

思ひは回じ尾花は、蜻蛉と一緒に右京の許を辭し、やがて別れて我が部屋に戻つたが、重成の變事といふことゝ右京の曇つた顏色とが、或時は離れたり或時は一緒になつたりして、小さい胸を針の尖でチク〳〵刺すやうに痛めつける。

然し尾花は重成が何んな内命を受けて何所へ行つたかは、右京から概略聞いて知つてゐる。又第一番に訪ねて行つた後藤基次と云ふ武士にも堅田の家にゐた折お目にかゝつて知つてゐる。義郷の話に其人は豊臣家の領内で大勢の家來を彼方此方に配置して、常に關東の間者を懲しめて居るとも聞いてゐる。先づそれへ指して重成が訪ねて行つたのであるから、諸所方々に散らばつてゐる後藤の家來がそれからそれへと聞き傳へて護衛するに極つてゐる。又重成の武勇の勝れてゐることも知つて知り抜いてゐる。仮令變事が起つても身に危害の及ぶやうなことがあらうとは何うしても思はれぬ。尾花は最初は斯ういふ樂觀説をとつた。そして氣丈な彼女は及ばずながら右京の局や饗庭の局を助けて、惡者の仕業の證據を押へねばならぬとまで思つた。

けれど尾花は情に於ては露に濡れた尾花のやうに優しい。であるからこの樂觀説と氣丈な決心とは、優しい情が承知せぬ。綱樣の身に若しも變事が眞實であつたらどうせう——優しい情は先づ潤み聲で斯う言ひかけて來た。すると四ッ五ッの頃よく綱千代に泣かされたことから、今日斯うして胸を離れぬ戀しい人になつた時のことまでが、走馬燈のやうに次ぎ次ぎと思ひ出されて來て、果ては綱千代が自分やら自分が綱千代やら、身も心もピッタリ喰着いて區別が無くなつて了ふ。

尾花は斯うして理性と感情との爭ひに惱亂して身も世もあられぬ思ひの中に、到々軒の雀の鳴聲を聞いた、『あれ、もう夜が明けた！』

（一〇）

春來て何うれしかろ、憂き雲の心を蔽へる蜻蛉と尾花とは、重成の安否その後杏として知るに由なく、直接に他に問はんも面伏せなる女の身が、今は却々に怨めしい。

年賀の御祝ひは例年に比べては餘ほど寂しいが、それでも吹き初めた春風に、松の内は局々の歌留多遊びや奥庭の追羽根のぞよめき、さゞめきが、ざんざ打つ住吉浦の漣波のやうに吹き送られた。

誘はれては無下に辭みも出來ず、蜻蛉も尾花も歌留多の席や追羽根の仲間に入りはするが、心は素より翼あらば飛んでも行きたい浮の空であるから、忽ちのうちにべタ〳〵と白粉塗られる。

『まあ、何ぞいな蜻蛉どの、去年はあれほどのお手並であつたに、チト確かりなさりませ。』

『蜻蛉どのは今日このごろ大分味な物思ひがお有りなさるさうでござんすわいな。』

『はてなア、それでは好い殿御でも……』

『さア、その邊は確とお受け合ひ出來ませぬが、このごろのお鬱ぎやうそれは〳〵普大抵ぢやない所から見ると……』

『矢張戀しい殿御がおありなさるのであらうわいなあ。』

口さがなき朋輩が右左から面白可笑しう嬲るので、蜻蛉はもう座に堪へられず、

『私、お頭が痛みますゆゑ、暫く御免蒙ります。』起たんとすると皆な口々に、

『まあ、そのやうにお憤り遊ばすものではござりませぬわいな。』と嘲るやうに浴せかける。

『いえ〳〵、決して然うではござりませねど……』と顏も得擧げず、急いで廊下へ出た蜻蛉は、耐へ耐へた溜涙堰きあへずよゝとばかり欄干に身を投げかけて泣くのであつた。

意地惡い朋輩衆から嬲られる蜻蛉を傍に見てゐた尾花も、もう胸が一杯になつて、瞼の裡を熱い涙がコロ〳〵しかけたので窃と席を退つて駈け出て來た。

『蜻蛉さま、お姉樣、お察し申します。』と堪らず折り重なつて泣くのであつた。

碧海を想はせるやうな大空に一點、何所の里へ歸りゆく雁ぞ、哀れに

啼いて飛んでゆく。

松の内は斯うして過ぎた。噂は噂を産んで、重成遭難の取沙汰は、今は御殿中誰れ知らぬ者も無い上に、又誰れ云ふとなく、上様御内々に人數を遣はして事の實否を取り質しに行くとやら、行つたとやら云ふことも加はつて、蜻蛉や尾花の胸は惱んだ上にも亂れ惱んだ。

今日は正月十八日、豐國大明神さまの例月のお祭りである。（豐國神社は當時城外城内の二箇所にあり）奥庭の森々たる杉檜などの間に、人工ながら神さびた社殿、玉垣、常夜燈、目を驚かす莊嚴はげに一代の驕奢である。神前御供の役は山瀨うけたまはつて、腰元二三人從はせ、打かけ姿きらびやかに、靜々と歩み寄る鳥居の蔭、チヨロ〳〵と走り出た珍柏は、態と思ひがけない顔付して、

『これは、山瀨のお局さま、お役目大儀に存じまする。』と揉手サラ〳〵頭ペコ〳〵。

『おゝ、これは好い所で珍柏、實は今宵お影祭の趣向にチト其方の智惠が藉りたいと思うて、今朝からいかい尋ねました。これ、皆の衆、先きへ行つてお掃除萬端お差配たのみまする。』と山瀨は腰元どもを行かせておいて、『時に珍柏、御前樣今日の御參詣を幸ひとして、蜻蛉が艶書の一

場、此間其方に頼んでおいたが、抜りないやうに仕遂げて下されや。』

『大丈夫、かつふつ御懸念御無用でございます。なにがさて、遠くて近いは戀の路、ましてや相手は御殿中がべた惚れの色男、蜻蛉ぢやとて心の内では早うに惚れくさつて居らうも知れませねば、あの筆法で行きまするなりや、いやもう大地を打つ槌は外れても、こればつかりや仕損ずる氣遣ひ更々ござりませぬ。』

『幸せと、あの煙つさい饗庭どのは、今日は城外の御本社へ御代參。』

『右京樣は御風邪でお引籠り。』

『珍柏、何と幸先きがよいでは無いかいのう。』

『したが、お的は何時こゝへ？』

『おゝ、蜻蛉は追つけ用事言ひつけて一人此所へ來させます。』言ひおいて山瀬はあたふた社殿の方へと行つた。

『こりや、いよ〳〵以て面白うなつておいでたぞ。それにしても長門どのは山賊に討たれたといふ噂を立てさせといて、蜻蛉に長門宛ての艶書を書かせる……はツてなあ……なゝなるほど〳〵、てもさても山瀬どのの智惠の深さ、フム、長門を殺し損ふた時の用意に、不義密通の罪をチャーンと拵へておき、又一方では不義はお家の御法度と蜻蛉を取つて押へる、なるほどな、こりや珍柏も一目ちやわい。したが、待てよ

山瀬どのは尾花御が的でありさうなものぢやが……』と珍柏が腕組みして思案してゐると、扨き足指し足寄つて來た銀之亟、耳元へ來て阿呆聲出し、『耳ッ遠う。』

びつくり尻餅、顔ふり上げて、『やい、この馬鹿め、いやさ馬鹿くさいほてゝいんごう、これ、せぬものぢや馬鹿くさい。』と塵打ち拂ふ佛頂づらを、木蔭に見てゐた梶の葉に小車堪へかねて吹き出すと、銀之亟も腹を叩いて大口あいて笑ひ立てる。

『よいわ〳〵、さうして澤山私を笑はしやれ、その代りもう何を頼ましやつても私や知らぬ、ソレあの誰れやらを取持つこともう止め〳〵。』

『あ、これ、惡かつた、堪忍々々、もう笑やせぬ、今おどかしたも私や厭ぢやと云ふたれど、梶の葉どのや小車どのが……』

『滅相な、銀之亟樣、私達そんなこと言ひはせぬぞや、よい〳〵、その樣な言ひがけするなら今の蜻蛉どのゝことはもう變改ぢや。』と笑ひを噛み殺して梶の葉が云ふ。

『あ、これ、言はぬ〳〵、私が惡かつたのぢや、堪忍々々。』と腰元の方へ泣顔向ける銀之亟の袖を珍柏は强く引き向けて、

『これさ、其方はそれで宜からうが、私への挨拶はどうしやる、私も取り持ちは變改ぢや。』

『こりや困つた、これ、頼む、拜む、堪へて、堪へて。』と十八男はやがてオーイ〳〵と泣き出した。三人は可笑しさこらへて眞面目顔する。

『これ、珍柏どの、腹立は尤もなれど、あのやうに泣かしやれるが笑止な、私達も我慢するほどに、その取持ちごとゝやら、肯いて上げては何うぞいな、な小車どの。』

『ほんにさうでござんす。してまあ、銀樣を誰れに取持つのぞいな。』

『皆樣がその樣に仰しやれば肯くまいものでもございませねど……』

『や、そんなら肯いて呉れるかや。』と銀之亟は泣顔ケロリとして眼をクル〳〵、三人の顔を眺めまはす。

『はゝゝゝ、これは現金な。したがその取持ちごとゝ云ふはな、皆樣お聞きなされ。こゝに一人の、それは〳〵美しい、左樣さ、昔で云ふなら小野小町、今で云ふなら出雲阿國、とまあ云ふやうな美人のお腰元があると思ひなされ所がその美人のお腰元が早うから首つたけになつて居る若いお侍がございます。何と皆樣、世には果報男もあつたものでございますなあ。』

『してその果報男といふは何所の誰れで名は何と云ふお侍でござんすえ。』

『これ〳〵珍柏、そのお侍は私では無いかえ。』

『おゝ、當つた、お前樣ぢや、銀樣ぢや。』
『して、そのお腰元といふは誰れぞいなあ。小車どの當りますかえ。』
『さあ、誰れであろ、花野どのか。』
『いや〳〵。』
『吉野どのか。』
『いや〳〵。』
『それでは錦木どのか。』
『いや〳〵、そら、あのお色が拔けるほど白うて、鼻の尖が猿椿のやうに紅い、椋鳥どのぢや。』

『ほゝゝゝゝ。』
『おほゝゝゝ。』
『何ぢやい〳〵、椋鳥ぢや、おのれ〳〵。』
『あ、これ〳〵、今のは笑談ぢや、笑談ぢや。聞かしやれ銀樣、蜻蛉どのが惚れて居るぞえ。』
『えッ、蜻蛉どのが、そりや眞實かい。いや〳〵又今のやうな笑談であろ。』
『何の〳〵、これは眞劍ぢや、命がけぢや、命がけで蜻蛉どのが、長門樣に惚れとるわ。』

と言ふが早いか珍柏は鳥居を潜つて一散に逃げて行く。おのれッとばかり銀之亟は腰刀引き抜いて追つかけた。

『ほゝゝゝ、氣散じには好い生きた玩具ぢや。』

『したが、阿呆にも戀はあると見える、どれ無駄口叩いて時を移した、御前樣の御參詣に間もあるまい、小車どの參りませう。』

神前の供物萬端終つて、山瀨が腰元引き連れて歸ると間もなく、蜻蛉は急ぎ足に社殿近くへ來て、千早振り袖神垣の、彼方此方を見廻はしながら、『はて何所へお忘れなされたのであろ。』となほあちこち探し歩いてゐると、鳥居の横から現はれた珍柏、前後左右を見廻はしつゝ、チヨコ〳〵走りにこれも神殿近く、

『これは、蜻蛉どの、お前さま何ぞ探してゐやしやるのかえ。』

『さいな、山瀨のお局樣がお扇子をお忘れなされたゆゑ……』

『お前樣に取つて來いと言はしやれたのかえ。』

『あい。』

『まあ〳〵、山瀨どのも他の腰元をお使ひなさるがよい、何ぼ腰元ぢやとて執權市正どのゝお娘御を御末でも使ふやうに。』

『これ、そのやうなこと云ふてたもるな、然うで無うても蜻蛉は父の威

光を鼻にかけると、皆様が蔭で言はしやる相なに。』さう云ふ間にも扇子のことが氣になるか、四邊をウロ〳〵眺めてゐる。

『どうも近頃大奥で僭上な振舞をする者があつていけぬ。それと云ふのも表衆に長門どののやうな……』

『えゝ、』と振り返る蜻蛉の心を珍柏は敏くも讀んで、『お扇子がありましたかえ。』と小面憎くも外所事を云ふ。

『どうも困つた、お急ぎぢやと云ふに。珍柏どのお前も共々探してたもれ。』と言ひながら階段の方へ行かうとすると、

『あ、これ、お扇子と云ふはこれではござりませぬか。』

『おゝ、どれ……ほんにこれでござんす。まあ何所にありましたえ。』

『鳥居の横に。實は先刻私が彼所へ通りかゝると是れが落ちてあつた故拾はうとして、此方を見るとお前様がウロ〳〵、こりやお前様のであらうと態々持つて來たのぢや。』

『それはまあ忝けない。私はお玉垣の側あたりと聞いた故、途々は駈けるやうにして來た。』

扇子受取つて一安心、歸らうとしかけたが、さて氣にかゝるは今珍柏が長門と言ふた一言である。蜻蛉は扇子の總を弄りながら、

『のう、珍柏どの。』

『えゝ、まだ御用がござりますかえ。』

『いゝえ、別に用事と云ふではなけれど、其方今長門様が何とかと言はしやれたのう。』

あはれ戀衣着初めた蜻蛉が思慮の眼は、お茶道が立てる濃い茶の毒に呟んだのである。珍柏は態と空とぼけて、

『はてな、長門様が、何とか……ウム〳〵言ひましたわい。その、何ぢや、大奥で僭上な振舞する者があるのも、表衆に長門様のやうな偉い忠義なお方がゐやしやらぬ様になつたからぢや、と言はうとしたのぢや確かさうでござります。』

『これは、あの、私が聞くのでは無い、實は私の仲好しの尾花様が、この頃の御殿の噂を聞いて、いかい氣遣うてゐさんすゆゑ、それであの知らして上げたいと思ふのでござんすが、あの、長門様のお身の上にお變りがあつたのか何うか、其方知りやらぬかえ。』蜻蛉は俯向き勝ちに口ごもりながら尋ねる。

神の御使のやうな淨い心にも、戀が教へる突嗟の智恵で、ツイ虚僞といふ罪をつくらせる。さても戀は曲者かな。

珍柏は手應へのあつた一矢に自づと顔に現はれる歡びをそれとなき薄笑ひに紛らして、

『さあ、私もこれは昨夜圖らずも聞いたことぢやが。』と言ひかけて、『いや〳〵、是れは言ふまい、他樣の秘密な奸計を……』

『えゝ、秘密な奸計？』

『さ、その秘密な奸計を洩れ聞いて、それを直ぐ他へ知らせるは罪ぢやと思ふに依つて、私やもう言はぬことに決めました。』舌頭三寸で一歩々々釣つてゆくその行きどまりに、深い深い陷穽のあらうぞとも氣のつかぬ蜻蛉は、何うやら重成樣の安否が解るさうなと思ふと、もう嬉しくて我れにもあらず珍柏の方へ一歩寄つて、『その、その秘密の奸計といふは若しや長門樣のお身の上に害をでも……』と心は早や急き込むのであつた。

『こりや口めが滑りくさつて飛んだことになつた。それでは蜻蛉殿。』と珍柏は四邊を見廻はして、『私は極く極くの極内でお前樣にだけ知らせるに依つてな、決して決して他言はして下さるまいぞ、よいかな。』

『あい、神かけて他言はしませぬわいな。』

『それでは話しませう、實はな、昨夜お茶室で轉寢して思はず夜を更かしたのぢや。不圖眼が醒めると何やら人の話聲、聲が低いのでようは聞えなんだが、切れ切れに聞いた話の後前を綜合してみると、何と此の御城中には怖ろしい惡者が居るではござるまいか。』

『えゝ、怖ろしい惡者が。』

『あゝ、思ひ出いても身の毛がよ立つ、聞かしやれ斯うぢや、長門どのがお旅立ちなされるとその惡者は家來を遣つて長門どのを途中で殺して了はうとしたのぢやが、名にし負ふ長門どののあのお腕前ぢや、どうやらその家來の奴は仕損じたげな、それで逃げ歸つた一人の家來の注進で近いうち長門どのが歸らしやると云ふことが分つたので、今度は鐵砲うちの名人に種ケ島の二聯發でズドンとやらせる……。』

『えゝ。』

『その打合はせを、昨夜夜更けてして居つたのぢや。私が腕に覺えのある身なら、そのやうな怖ろしい惡者、その場を去なさず眞二つにするのぢやが、情ないことには私は丸腰のお茶道ぢや。それなら七手組へでも注進すればと思はしやるであろが、惡者の話最中お茶室を出ようものなら、この命は何程あつても堪らぬ、と云うて眞暗黑ぢやで顏は見えず、忍び聲ぢやで聲の主は解らず、何を證據に注進が出來よう。や、もう怖ろしさ怖さで觸らぬ神に祟りなしと、狸寢入はして居つたものゝ、いやはや命は三年縮めましたわい。』

若し豐國神社に靈あらば、この古狐のやうな茶坊主、その場に脚腰立たぬやうになつたであらうに。蜻蛉は一層迫き込んで、

『して、その種ケ島の狙ひ撃、場所は何所でござんす、聞かなんだかいなあ。』

『場所？　ウム場所、場所は、その長良堤。』

『えッ長良堤？』

『さうぢや、物騒な山中では勇士は油斷せぬに依つて、もう大阪へ着いたと安心の氣が緩ん所を待ち伏せて狙ひ撃。』

聞くより早く蜻蛉は小褄掻い取り駈け出さんとする。珍柏慌てゝ引き留め。

『これさ、氣相かへて何所へ行きやる。』

『何所とは知れたこと、このこと七手組へ注進して長門様を……。』

『助けると云はしやるか、そこぢや、待たしやれ。この珍柏も豊臣家のお米で命を繋いで居る者ぢや、長門様のやうな忠臣を無殘々々殺すは惜しい、何うぞして助けたい、とさあ昨夜終夜寢ずに思案した、な思案しました。』

『して、その思案といふは？』

『思案といふは斯うぢや、一方表衆に注進して長良堤に待ち伏せの悪者を引捕へることになし、一方長門どのにこのことをお知らせして、長良堤を歸らぬやうにさせることぢやが、長門どのが何時お歸りなさるか、

それが分らねば表衆にも手段はない。ぢやに依つて差當り猶豫のならぬは長門どのへお知らせすることでござります。それもこの珍柏風情がお知らせしたのでは、お取り上げないは定。さこゝぢや、蜻蛉どのお前樣手紙書きなされ、お前樣からお知らせするなら、父御と長門どのはあのやうな親しい仲、必ずお取上げなさるに決つてある。近いうちと言へば明日、いや今宵のことかも知れぬ、と思ふと私やもう氣が急けて、氣が急けて……。』

蜻蛉は思案した、珍柏の云ふ所確かに道理ありと思つた、戀しい人のそのお身の上に、今宵にも一大事が湧いて起らうも知れぬといふ、彼女に此上思案する餘裕がないではないか。

『では、若し私が手紙書いたら、それを長門さまにお届けする手段はえ。』

『それはいと易いことぢや、な、この珍柏は何時何所をウロツイてもお咎めない身を幸ひ、今日今からその手紙持つて、長良堤みを一里向ふへ姿を變へてお待ち申して、必ずそれはお手渡し申します、珍柏が忠義の爲時ぢやござりませぬか。』

『おゝ、よい思案かしてたもつた。』

『それでは手紙お書きなさるか。』

『書きます、書かいでか、と云うても此所には料紙もなし……。』

『なんの、落ちついて書く時候見舞ではあるまいし、品好みは優長でござる、懐紙に紅筆で結構間に合ひますぢや、さ、ツイ鳥渡。』

急き立てられて取り出す懐紙に紅筆の運びサラ〳〵と、長門さままゐると書き結んだ。

と、この時早く何所から忍び寄つたか銀之亟、今蜻蛉が珍柏に渡さんとする手紙を、矢庭に引つたくつて逃げ出す。それ達つてなるものかと駈け寄る蜻蛉、驚く珍柏、遠目に之れを鳥居蔭から椋鳥が睨で飛んで來て、出合ひ頭に銀之亟が鬼の首取つたやうに指し上げてゐるその手紙をあッといふ間にもぎ取つて、羽音すさまじく鳥居の方へと取つて返す。

遣らじ離さじと追ひつ追はれつ、何れは戀の絡みの絡み合ひ、氣も惱亂して奪ひ合ふうち、緣や薄き前兆なる、手紙は切れ切れに裂かれて了つた。

折りしも木精にひゝく童小姓の甲高聲。

『御前樣の御參けい――ッ。』

（一一）

不義はお家の御法度であるから、嚴しい處刑にも遭ふべきであるが、何樣現の證據の手紙が形なきまでに寸斷られたので、流石好智の山瀨も

何と纔訴せん術もなく、只だ戀の嫉妬に椋鳥が有ること無いこと輪に輪をかけた申立てと、お茶道珍柏が掌返す腹黒な言立とを當座の證據として、淀君は蜻蛉が身を部屋親饗庭の局に預けよと命を下した。

夜もすがら物思ふ身には閨の隙さへ情なきに、これはまた、思ひがけない奸計の陷穽に、戀の浮足うかと踏みすべらして、不義密通の疑ひかけられ、幽閉の身となつた市正が娘蜻蛉は、秋ならなくに色褪せて、浮世の憂きを身ひとつに、脊負ふ薄羽は破れ萎れ、夜を夜もすがら忍び音に、泣きくづをるゝこそ世にも哀れの極みである。

一睡もせず泣き明かした涙の顔を、部屋親初め朋輩衆に見られるも恥と、朝は例の通りに起き出でゝ、例の通り鏡に向つて白粉の刷毛や紅筆は執つたが、映る我が顔の一夜の間に窶れ果てたのを見ては、何うして刷毛が使はれよう、紅筆が動かうぞ。

親切な饗庭の局が心痛の餘り顔色も蒼褪め、食も進まぬとて、今朝は執り上げた箸を餘り動さずに、それでも出仕はおろそかならねば、心を殘して出て行つた後は、森閑とした局で蜻蛉は又身悶えして泣くのであつた。

『それは、重成樣を戀しいとも慕はしいとも懷しいとも思ふて居ります

それは思ふては居りますれど、何の汚らはしい不義の密通のと、身に更

〳〵々覺えなきことも、あの手紙が破れたばつかりに言ひ解くことが出來ず……あゝ口惜しい！　あゝ、情ない！　これが父様母様のお耳に入つたら、まあ何んなにお怒り遊ばすであろ、お嘆き遊ばすであろ、いや、それよりも、それよりも、若しこの疑ひが重成様のお身にまで及んだら何うせう、私が死ぬほど戀ひ慕ふてゐる心が、あの方様に知られるは切めてもの心遣りではあるが、そのために夢にも御存知ない汚名を被せられたら、まあ何のやうにこの身を端なしと卑みなさるであろ！　愼しみなしと侮みなさるであろ！　私の心を不憫とお思召すよりも、愚かと嘲笑ひ、憎しとお憤り遊ばすに違ひない。あゝ、もう私の戀は達かぬ、叶はぬ、徹らぬ、破れた、破れて了ふた……！』と身を悚はして泣き沈む所へ、廊下を草履の小刻みに、

『蜻蛉さま、おゐで遊ばして？』と優しう訪ふは尾花であつた。蜻蛉は急いで涙を拭つて次ぎの間まで出迎へると、寂しい笑顔の尾花は部屋の入口にシヨンボリと立つてゐた。二女は顔見合はすともう涙をハラ〳〵流して、果ては堪らなくなつて犇とばかり抱き合つた。辭なきは辭あるにも增して、悲しみと嬉しみとの極度に達した二女は、この身體離るゝな、この身溶け合へど何時までも抱き締めるのである。

他を疑ふ心の露ほどもない尾花は、昨日蜻蛉の手紙一件を聞いたけれ

ど、あの人に限つて何でそのやうなことがあらう、皆惡人の奸計ぢやと思ふと、直ぐにも逢うて慰めたいとは思つたが、その日はお祭のことゝて役目の用事繁く、夜になつては右京の介抱に一寸の暇もなく、昨夜一夜を胸をやきもき過したが、今日は右京の慮りで一日出仕を休むことになり、今少しの暇を見付けて訪ねて來たのである。

『な、蜻蛉樣、どうぞお力を落さぬやうにして下さりませ、私はどのやうにもしてお力になります、饗庭樣や小母上樣にお縋りして、何うでもしてお姉樣の濡衣は干しますゆゑ、な、な、どうぞお力を落さずに……』と首を傾げて顏を覗く。

『尾花樣、何時もながら貴女の御親切、私やお禮も口へは出ませぬ。』と咽び上げながら手を合はす。尾花は慌てゝその手に取り縋つて、

『まあ、勿體ない、何でそのやうなことなされます。私はこの世に只つた一人のお姉樣と思うて居りまするに……』尾花も込み上げて口が利けぬ。

春の日の朗らかな日影もこゝには射さぬか。

『蜻蛉どの、お内でござんすかいなあ。』と思ひがけなく訪れて來たは、聞き覺えある正榮尼の嗄れ聲、蜻蛉も尾花も怖氣立つほど驚いた。

蜻蛉に代はつて出迎へる尾花の顏を見て尼御前も少からず驚いた樣子

『これは、尾花どの。』と尻眼にかけて部屋に通る、蜻蛉は泣き顔俯向けて例のやうに挨拶する、正榮尼は輕く受けて、

『この度は又飛んだ御災難、嘸ぞ口惜しうもござらうけれど、濡衣は直ぐ乾く時節の來るもの、この頃御前樣は御心配事が多いので兎角御短氣にわたらせられるが、何れそのうちこの尼が折りを見て、屹度言解きして進せるほどに、必ず心配しやんな。心配は身體の毒、病氣にでもなれば母御は何のやうにお心を痛めなさらうも知れぬ、子を思ふ親心は皆ひとつゆゑな。』と飛んだ所で馬鹿息子を思ひ出す。

『いろ〳〵とお心遣ひ、忝けなうございます。』

『何のそのお禮、濡衣が乾いてから澤山聞きませう、へッへゝゝゝ』何のためやら水晶の念珠爪繰りながら、『時に尾花どの、右京どのはお風邪氣ぢやと聞きましたが、お加減と何うでござんすぞいなあ。』

『はい、有難う存じます、今日はもう餘ほどお宜しい御樣子でございます。』

『それは重疊、したが尙ほ此上御介抱怠らぬやうにな、追つては其方のお姑ぢや、今から孝行しておかしやれ。』

尾花は顏を紅めて差俯向く、蜻蛉は驚駭の眼を睜る、正榮尼は他人の憂き思ひや恥かし氣を思ひ遣るやうな胸の水々しさは、年と共に涸れつ

きてゐるので、又つけ〳〵と、

『長門どのはあの様な器量人な上に若い女には好かれる御様子、尾花どのは絲竹の嗜みも勝れた佳人、押し並べたら好い御夫婦、ほんに右京どのも苦勞のなさり甲斐があつた。御祝言はもう直きのやうにも聞きましたが、何時頃でござんすえ……へゝゝゝ、若い女は兎角恥みなさる、何の親々の容した御祝言ぢやものを、へゝゝゝ。』

大奥に奉仕する尼御前ともあらうものが、あまりと言へば無禮至極と尾花は腹立たしさ極まつて顔色も蒼ざめたが、それでも一言云ひ返すこともならず、此上長居しては何のやうなこと言はれうも知れぬ、何時になく正榮尼の訪ねて來たことも心がゝりではあるが、その憤つた心はもう暫くも座に堪へられぬ。

尾花が俯向き勝ちに會釋して出て行く後姿を見送つて、『先づ邪魔者が去んで呉れた。』と正榮尼は心にニッ、ニッと笑んで、

『尾花どのがゐても差支ないやうなものゝ、大事な話ゆゑ又出直さうが と思ひましたら、幸ひ歸りやつたから話すことにしませう。蜻蛉どの、御前様のお怒りはそれは〳〵大抵なことではござんせぬぞえ。他々の腰元衆なら知らぬこと市の匠が娘ともあらうものが、とこれがお怒りの高じる第一ぢや。したがそれはほんの表面、其方も知りやる通り長門どの

に對しては御前樣には叶はぬ戀の怨みがある。その長門どのへ對して、中味は先づ何うあらうとも、懷紙に紅筆の走り書きは馴れ睦む戀仲の飽書としか受取れぬ、眞のお怒りはこれでござんす。』さらでだに弱りに弱つた蜻蛉を正榮尼は先づ斯う言つて嚇かしつけた。蜻蛉は最前聞いた長門と尾花とのことを思ひ煩うてゐるのでよくも耳へは入らなかつたが、お怒りといふことだけは強く耳にひゞいた。

『まだそればかりでは無い、この分では相手の長門どの、延いてはお前樣父御、長門どの母御にも普通ならぬ御憎しみを向けられうぞえ。』

『えゝッ。』

『關白樣の愛妾三十餘人を生埋めにして畜生塚を殘したも、原はと言へば御前樣の嫉妬から。さ、さう云ふ怖しい嫉妬深い御前樣ゆゑ、戀の怨みのためには一族を斷絶す位は爲兼ねまじい。』

『えゝ、一族を……』戀しい長門樣、懷しい御兩親樣、御親切な右京樣それが皆あの手紙のために怖ろしい憎しみを受けるのかと思ふと、蜻蛉はもう生きてはゐられぬと思つた。

『思うてみても身の毛がよ立つ樣なことにならうも知れぬに依つて、これは今の内早うお詫びをせざならぬ、がそのお詫びは當の相手からではお怒りの募るは知れてある。こゝは何うしても關係の無い日頃お氣に入

りの者から取り做しするより外はござんせぬ。』斯う言つて尼は自分の放つた毒矢に相手が傷き苦しむのを見でもするやうに蜻蛉を見詰めた。蜻蛉はもう血の氣が失せて了つてブル〳〵と身慄してゐる。

『それでこの尼も他事には思はれず、早う肝煎りして御前樣のお心をお鎭め申たいと思うて居ります、幸せとこの尼の申上げることは從來何でもお取上げ下さるに依つて、何あつてもこれもお取上げあるやう持ちかけます。』

正榮尼はなほ小膝を進め小聲になつて口の小止みなく、小半時ばかり語り續けて歸つて行つた。そして局口へ出た時のその顏は薄氣味惡いほどホク〳〵してゐた。

引き交へてあたふた歸つて來た饗庭の局、

『おゝ、蜻蛉、そこにかいの、私は氣にかゝることがある故御前樣の御用をかね、烏渡お表へ行て來るほどに……それは然うと、今局口のゝイ先きで正榮どのに逢うたが、此所へござつたのではないかえ。』

『アイ、ござりました。』

『それは稀有な、して何の用で。』

『さいな、尼御前樣は私の胸をよう察して、段々と御しんもじなお諭し御前樣の御不興も屹度言ひときお詫びして進ぜる……。』

皆まで言はせず局はやゝ急き込んで、

『これは猶更以て稀有ぢや、訝しい、日頃意地の惡い尼御が手の裏を返すやうな親切ごかしが第一不審……』

『その代り私にも……。』

『えゝ、その代り其方にも……。』

『銀樣の願ひを叶へて呉れいとの仰せ。』

『して、して、其方何と挨拶しましたえ。』

『疊みかけられ、辭に詰つて……。』

『得心しやつたのかいなあ。』

『アイ。』と蜻蛉は堪へず泣きくづれた。

『えゝ、無体な、部屋親の留守へ來てそのやうなこと。これ、蜻蛉、耳が潰しや。』饗庭が蜻蛉の耳に口寄せて辭短かに呟くうち、蜻蛉は打倒れんばかりに驚いて、

『えゝッ、すりやあの長門樣も御不審お受けなされましたか。』

『あア、歸るを待つて嚴い訊問とのこと。まだそればかりぢやない、最前洩れ聞いた怪しい取沙汰……こりや斯うしては居られぬ。これ蜻蛉油斷のならぬは人心、決して氣を許してはなりませぬぞ。』と心を殘して出て行つた。

この日市の匠の邸へ訪れた旅装束編笠眉深の三人の武士があつた。編笠取つて書院へ案内された顔を見ると、雁行に席に着いた上座のは年のころ四十五六才、眉長く眼大きく額廣く威あつて猛からぬ武士、次ぎなるは年は四十を二つ三つ出たほどなれど、赤銅色の顔に鎌髭バリ〳〵と生へてゐるので却つて年嵩に見える、立てば七尺餘もある大男、大盤石のやうに控へた、末座なるは之れは又前二者とは打つて變つた色白の眉長き美男、長途の旅に月代こそ伸びたれまだ二十歳の聲は聞かぬらしいこの三人果して誰れであるか、茲には執權市ノ正が禮を厚うして迎へたことだけを書きつけ、姑く讀者の判斷に任せておく。

（一二）

梶の葉、小車、吉野、腰元大勢銀之亟を中に圍んで口々に、

『これ、銀樣、そんならいよ〳〵蜻蛉どのが應と得心したのかいな。』

『さうぢや、應と得心したに依つて、もう御前樣が諾と言はしやれば明日にも祝言ぢやわい。私や嬉しうてならぬ〳〵。』

『では、その前祝ひに今どは何ぞ舞うて見や。』

『さうぢや〳〵銀樣は城内切つての舞の名人。』

好い玩弄物と右左から調戯顔に褒めそやすと、よしきたと、節も拍子

もあらばこそ、やつちや嬉しの亂れ舞ひ、踊り最中へ局の方から人聲迸
昔ドツタバタ、色眞蒼の腰元が、
『大變ぢや〳〵、皆さん大變でござんす、蜻蛉どのが自害してお死にや
つた。』
聲におどろく大勢の腰元、見合はす顏も早や土色の土人形がバラ〳〵
と局をさして駈けて行く。
見ると、臨終の際、此世の名殘に焚き込めた伽羅の香高き几帳の陰に
取り亂したる態を死後に殘さじとてか、白羽二重の扱帶で座つた膝を固
く結んだ蜻蛉が、左乳下守刀の柄も通れと突き立てゝ、只だ一思ひ、
思ひ殘した二通の書置は、飛ばしる血汐にあはれ散る花の濃き紅に汚れ
てあれど、水莖の跡も麗しく讀まれる『お懐しき御兩親樣へ』『御親しき
尾花樣へ。』
暮近き春の日影が弱々しく丸窓から流込む。
さて又此方に取り殘された銀之亟、最前母者から『銀どの喜びや、蜻
蛉どのを嫁女に貰ふ約束したぞや。』と聞かされて、うつけながらに戀の
暗路に夜が明けたと喜ぶこと限りなく、餘りの喜ばしさに小躍りしなが
ら家を飛び出し、まだ躍り足らいで今此所で、腰元どもに取り卷かれて

踊つてゐると寢耳に水の蜻蛉が自害、驚駭は通り越し心が遠くなつて打倒れた。軈て奥から局へ馳せつける人々に抱き起され、呼び活けられた時には、顔色は凄味を帶びたほど蒼ざめ、眼をキヨロ〳〵させて虚空を見詰め、ゲラ〳〵と笑ふかと思ふと又泣顔になつて、

『其方は何故死にやつた、私をおいて何故死にやつた……いゝや、嘘ぢや、おゝ生きて居つた、そんなら今から宅へゆこ、さあおじや。』と誰れかの袖を引くやうな手振りをして、

『何所へ行く、これ、又つういと起つて去にやる、あゝ、行きやる、行きやる。』と取り卷く人々突き退け蹴り退け、お庭の方へと跣足のまゝで駈けて行つた。

* * * * * * * * *

小夜更けて蘭燈影淡き部屋に、尾花は獨り悲嘆の涙に掻き暮れた、膝の上に丈なす料紙に走り書きの麗はしい女文字、是れぞ蜻蛉が一字々々に死出の山路に近づきながらも、心を置めて書き遺した一通である。尾花はこれを最前から讀んでは泣き、泣いては讀み、幾度讀み返し泣きくづをれたであらう！

一樹の蔭一河の流れも他生の縁と承り候に、世に妹無き身と姉無